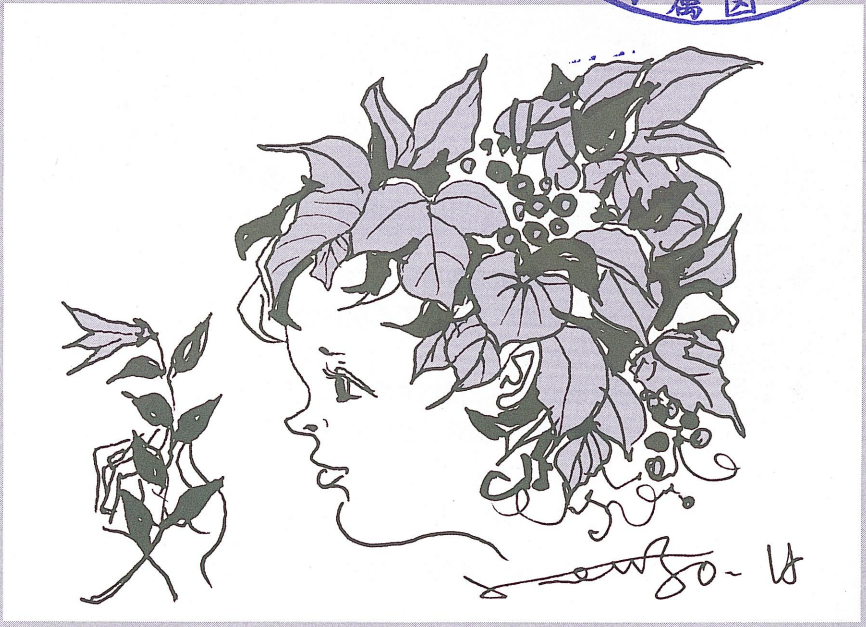
幼児の教育　第89巻　第２号　平成２年２月１日発行（毎月1回1日発行）　昭和23年4月15日第三種郵便物認可　ISSN0289－0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

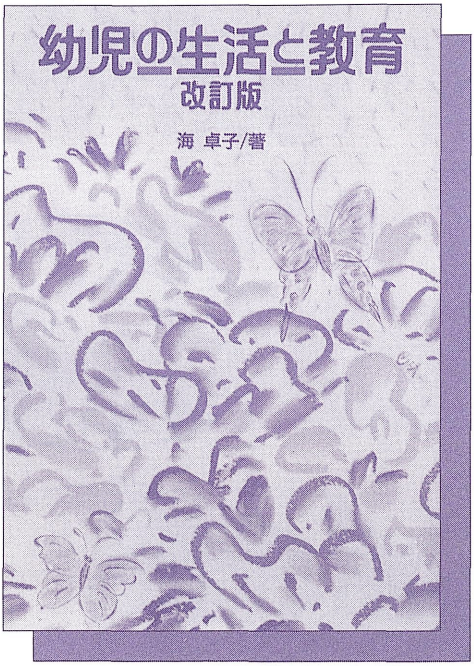
1990－2

お茶の水女子大学
平成
1.16
受贈
附属図書館



第89巻　第２号　日本幼稚園協会

幼児の生活と教育



改訂版

集団生活の中で子どもの認識はどのように深まってゆくか。最近の幼児を取り巻く環境の変化と、音楽リズム、劇遊び等表現にかかわる実践を加え、全面改訂。

●子どもたちの自主的な活動を生かしながら、子ども一人ひとりの性格や能力、とりわけ、認識能力を育てる保育の理論とその実践の姿をわかりやすく述べています。

●本来あるべき幼稚園教育の、最も大事な本質的なものを追求してきた著者の、50年にわたる努力精進の足跡が、静かに語られています。

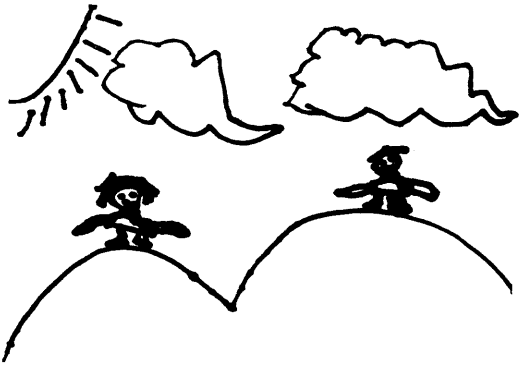
海　卓子・著

A5判・354頁・定価1,650円(本体1,602円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第89巻　第2号

幼児の教育　目次

——第八十九巻　第二号——

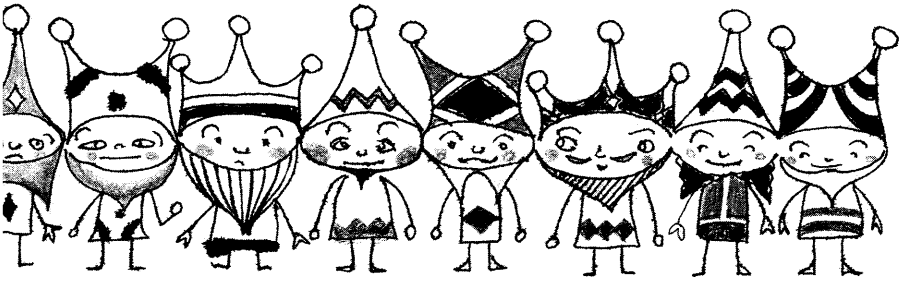
〈巻頭言〉
小さな園の物語……間藤　侑…（4）

人間の成長における行為の意味
持つことと失うこと(2)……津守　真…（8）

〈鬼〉をめぐって
鬼ゴト……大藤　ゆき…（14）
天邪鬼な、ある女の子との鬼遊び……湊　良子…（20）
鬼のまま　すてきママ……松井るり子…（26）

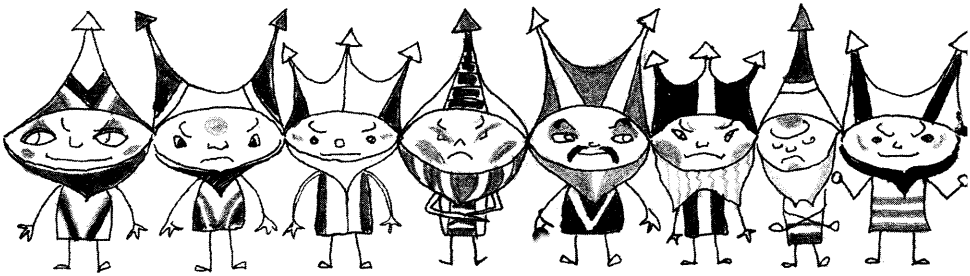
Mくんと私……吉岡　晶子…（34）

© 1990
日本幼稚園協会



臨床の現場から
私の出会った人々（六）……安島　智子…（37）
海外便り〈アメリカ編〉
Eさんへ……青木　章子…（46）
遊びのまわりで
――二人の保育者の語り――……片岡知子・猿渡英理子…（52）
若いお母さんたちへ
若木（わかき）が三歳になる頃……杉本　裕子…（57）

表紙イラスト・林　健造
扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／村山　英子
豊田　一秀・上坂元絵里
編集部・大沢　啓子



〈巻頭言〉

小さな園の物語

間藤　侑

あるところに、とっても小さな幼稚園がありました。三、四、五歳児合わせてもやっと四十八人、年長児などは男児三人女児五人の、たった八人しかいません。先生たちの悩みは、自然環境にも乏しく思うような経験もなかなかさせてやれないことでした。しかし、年長児だけ、園児百五十人ほどの姉妹園と合同の夏祭り大会に参加した時、先生たちの不安をよそに、姉妹園の年長児の八つのグループに一人ずつ入った彼らの方が、一番のびのびと夏祭りを楽しんでいる様子に先生たちは本当に驚かされます。

その秋のある日、子どもたちは、一つしかない調節式の室内用の鉄棒でちょっとしたトラブルに出会っていました。身長の違う年長児と年少児が鉄棒の高低でもめています。そこに通りかかった年長の先生が、「小さい子にゆずってやりなさい」と言っ

て行ってしまいます。ところが、すぐその後に年少の先生がやって来て「もり組さんの言うこと聞くのよ」と言ってやはり向こうへ行ってしまいます。ちょっとした寸劇です。ほとんど時間を置かないで、二人の先生が全く反対の指導をしたまま行ってしまったのです。（ちょうど他の園から見学に来ていた先生が、さてどうするかと興味しんしん眺めていました。）さて皆さんなら、或いは皆さんの園の園児なら、どうするでしょうか。

見学の先生は《うちの園の年長児ならきっと先生がそう言ったと年少児を追い払うだろうし、年少児なら先生に言い付けに行くだろう》と考えました。しかしこの園の子どもたちは、どちらの方法もとりませんでした。ちょっと相談をしていたかと思うと、年長児の一人が、大きな積み木を一個持って来ました。年少児用の台にするのです。一々身長に合わせて調節する必要はありません。子どもたちは見事に自分たちの力で問題（トラブルと、先生の置いて行った矛盾というかなり難しい課題）を解決したのです。

先生たちは、のびのびと自由な保育を目指してはいたものの、常々環境に一番頭を痛めていた時に、特に新しい教育要領が「環境を通しての教育」を大きく掲げていることもあって、自分たちの保育に少々自信が無く不安でした。ところが、合同保育では、どう見ても自分の園の八人組の方がずっと堂々としていたし、見学の先生からは、トラブルを解決する力の育ちを羨ましがられるし、一体どうしてこうなっているのか、今度は逆の意味で戸惑ってしまいました。

このエピソードは、幼児教育の本質に関わる少なくも二つの重要な示唆を含んでいるように思われます。先ず第一は、幼児教育における望ましい経験とは何かということについてです。この園の幼児たちは、「〇〇したことがある」という意味の経験はも

しかすると多くなかったかもしれません。しかし、いろいろな機会に自分たちの力を試してみるということ、みんなで協力しあうこと、一人ひとりの考えや活動が大事にされることなどの経験が、どの子も充分に保証されていたのではないかと推測されます。その経験が一人ひとりの自信ある行動や自分たちで問題を解決できる力を育てたのだと考えることができます。

私たちは、ともすると、「あれもした」「これも見た」「そこも行った」というように確かめられ数え挙げられる外側の経験だけにとらわれて、つい子どもたちの心にとって最も大切な経験は何かということを忘れがちです。その結果、個々の発達の課題を大切になどと言いながら、結局は、例えば「自分勝手な行動をする」「友達の中に入って行かれない」子は、友達経験を多くさせてやればよいというような、短絡的な発想から抜け出せないでいるように思われます。このエピソードは、そのことを教えてはいないでしょうか。

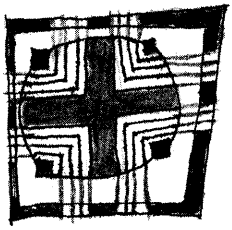
次に、ではこの園のどんな状況が、子どもたちを育てる大切な経験を生み出したのでしょうか。おそらくそれは、環境としての先生たちの在り様ではないだろうかと思います。園児の多い園では、どうしても学年や学級単位でまとまるようになってしまいます。園児は自分のクラスの先生だけが頼りで、その先生との関係がうまく結べないと、なかなか自己発揮できません。先生たちもまた、自分のクラスの保育に追われて他の方に心が向きません。目には見えないこうしたことが意外に大きく作用し、どちらかというと閉鎖的排他的な、人間的に小粒の子を作っていく危険が無いとは言い切れません。

しかし、こんな小さな園では、先生も子どももクラスなどにこだわっていたら何も出来ません。ごく自然に、実質的に三人の先生が四十八人の子どもを教育するという態勢になったのです。ここで特に強調されることは、大人三人のチームワークの良さで

す。この結果、園は、クラス単位より優位の子どもたちとそれを取り巻く大人たちという、二つの集団構造となります。子どもたちは大人たちに見守られ、安心して自己発揮の経験を積み重ねていったのに違いありません。夫婦が愛情と信頼で結ばれ、また親として、子どもたちをも信頼して落ち着いた対応をしている家庭の子どもは、自信をもち意欲的でしかも他者受容的な性格に育つと言われますが、幼稚園や保育園も全く同じだと言えるでしょう。

一昔前の時代、子どもたちの世界と大人たちの社会は、ある意味ではっきりと分けられていました。子どもたちは、大人社会から少し距離を置いて暖かく見守られ、その分また厳しくしつけられていたと言えます。大人たちと子どもたちの間には相互信頼が結ばれ、子どもたちは安心していたずらや冒険や異年齢を貫く遊びができ、それを通じてたくさんのものを学ぶことができたのです。考えてみると、これは幼児教育のあるべき姿と何と重なりあうことでしょう。そのことがやはり大切だったのだということを、この園の先生と子どもたちは思い出させてくれました。先生たち、どうぞ自信を持ってください。

（新潟大学）



持つことと失うこと(2)

津守　真

手に持つもの

子どもは学校にくるときに、しばしば何かを手に持ってくる。長い期間にわたって同じ物を持ってくることもある。遊んでいる間にどこかに置き忘れてしまって、帰るときに見付からなくて大さわぎすることもある。いつもそれを手に持っているのは、それとかかわりのあることをいつも考えているからだろう。

五歳のT夫は、毎朝家から学校にくるときに、小さなバスや電車を両手に持ってくる。ある時期、それを一日中手から放さないことがつづいた。水洗便所でトイレットペーパーを流す遊びをしていたときもそれを手に持っていた。次第に熱中してくると、それを棚に置いたりしたが、立ち去るときには忘れずに持っていった。そのために活動が制約される

ように思えて、母親はそれを放させようと試みたこともあった。しかしT夫は足で地面を踏み、声を立ててそれを持つことを要求した。このようなとき、私はそれは子どもが気持ちのよりどころにしている物だから、自分から手放す気が起こるまで持たせるようにしてきた。これまでも、ある子どもはひもを、ある子どもは小さなボールを手から離さなかった。そして手からはなすようになる頃には、私もそれがその子の内的生活にとってたいせつな物であることが分かるようになっていた。T夫の場合もそうであることを疑わなかった。

あるとき、私はT夫と一緒に外に出た。T夫はまっすぐに地下鉄の改札口に行き、ホームに電車が来たりいったりするのを長い時間見ていた。電車が一台発車してしばらくすると向かい側の電車がホームに止まり、また去る。一台去ってもまた次の電車がくる。上り下りのホームに電車が来ては去るのを見ているのはあきないことだった。それを見ているうちに気付いたことは、来た電車が去っても次の電車があらわれて、失われたものが再び得られるというテーマがここにあることだった。T夫がこうして二時間も電車を見て過ごすのは、この疑問を考えているのではないかと思われた。T夫がいつも両手にバスや電車を持って登校するのは、このテーマを考えつづけているからではないかと考えた。前回に述べたように、もしも私の推論が間違っていなければ、この子どもは、母親喪失の体験――一度立ち去った母親が再びあらわれるかという疑問――を探っていた。それをトイレットペーパーが排水口の奥に消えてゆくのを確認する遊びに表現していた。これらの遊

びの意味を発見することは、この特定の子どもの生活が展開するために欠くことができないのであって、この子どもに独自の意味である。同じ行為であっても、別の子どもには別の意味がある。

個人的意味と普遍的意味

九月末のある朝、T夫はいつものように両手にバスと電車をもって登校し、流しで容器に水を入れては流すことをくり返していた。私の傍で一緒に見ていた母親が突然言った。

「わたし考えたんですけど」

私　「何を考えたの？」

「この子がトイレットペーパーを流すのも、循環なんです。電車をみるのも、同じ電車がくるわけじゃないけど、いってもまたくるんです。」

私はT夫の母親がこう話すのを驚いて聞いていた。私だけでなく母親も同様に考えている。

この遊びの中に、失われたものが再び得られるかというT夫の疑問がかくされているのを母親も気が付いていた。そして更にこの母親は、循環という普遍的認識にまでひろげようとしている。

ひとつの行為の意味を考えるのに、行為者の生活に内面的に参与し、その子どもの生活を展開しつつ、その動力となっている意味を発見しようとするのが、保育における方法で

ある。その過程において、ひとつの行為をとり出して、それを他者にも起こりうる行為と考え、他者のひとりである自分をも含めて、その意味を探る試みをする。そのとき、特定の子どもにとっての意味は、他の人に対してもひろげられ、普遍的意味となる。保育の思考にはこの両者が含まれる。

この母親が循環と言ったとき、排泄物が大地にもどり、作物を実らせて食物となり再び排泄されるというように、ひと度失われたものが違った形で再びもどってくるという自然の循環作用を指していたのだと思う。この子どもは、これらの行為を通して、循環という普遍的認識をもしていると言えるだろう。私がこの行為の意味を考えていたのと同時に、母親もこのことを考えていた。そしてT夫自身もこのことを考えたのだろうと思う。ひとつの行為は、個人的意味をもつと共に普遍的意味をもっているのだと思う。

二か月以上たったいま、T夫は長い間手に持っていた電車やバスを、もはや手に持っていない。それをもつことの意味が認識されたとき、自分からそれを手放せるようになった。ただし、夜ねるとき、自分のふとんの中に電車とバスを一杯いれてねるという。

持つものを手放せるようになったとき、T夫は自分から外界に関心をもち、いろいろの人と遊ぶようになった。日に一度は電車やバスを見に学校から外出しないではいられなかったのに、一日中学校の中で過ごし、自分から遊ぶことを見つけている。保育者の側からいうならば、それまで極度に神経を使って接しなければならなかったが、そういう心配

はいらなくなった。

この子どもは、自分らしく生きられるようになったのだと思う。

獲得すること——持つこと——失うこと——あること

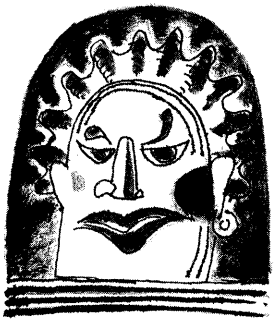
獲得することは自分の領域がひろがることであるが、それには困難や努力が伴う。ひとたび獲得したものは、「もつ」ことになり、それを手放し失うのには、新たな努力を要する。自分が獲得したものは、手放すときにも主体としての自分があるから、手放すことも比較的容易である。しかし自分が獲得したのではなく、運命的に持つものは手放す（失う）ことは容易でない。それを失っても「ある」自分を発見しなければならない。幼い子どもにとって母親は最初から自分の一部であって、それを手放すことができるようになるのには長い過程を必要とする。

成人して後にも、人は各時期に「もつ」のが当然と思っていたものを失う危機に直面する。そのときに、それを失うことにより、本来の自分を発見して生きる機会が与えられている。つまり、「もつ」ことから「ある」ことへの転換の時である。

青年期には、人は獲得することによって自分が強められることへの情熱と喜びを経験する。成人期には、他人のために獲得し戦う。そして次第に人は失うことによって、「ある」ことのよろこびを知る。その「ある」ことは、成人してはじめて知るのではなく、幼年期から体験されている。物を手に持つことを知らない乳児の初期に、子どもは自分が存

在することの快さを、周囲の人々との平和な生活の中で体感している。幼児期に、子どもは何かに執着しなければいられない葛藤から解放されて、自分で遊べるようになる。すなわち、「もつ」ことから解放されて、自分が「ある」ことを体験する。人間の生涯の中で、人はいろいろのものを獲得し、持ち、失い、自分自身としていまを生きる（ある）ことへと立ちもどる。「もつ」ことの価値が過大に重視される文化の中で人間が成長することの困難さをあらためて考えさせられる。

（愛育養護学校）



〈鬼〉をめぐって (1)

鬼ゴト

大藤　ゆき

子どもの世界に出てくる「鬼」には、どんなものがあるでしょうか。

「鬼ごっこ」は、日本では古くから現在までの長い間、子どもたちの間で好まれている遊びの一つです。

鬼キメという一つの方法――主にじゃんけん――で、一人の「鬼」という主役（シテ）をえらびだし、重い責任をもたせて、大ぜいの群に対立させるというこの経験は、子どもの心身の発達の上に、ひとりで堪える、みんなと自分を考えるなどいろいろな効果をもっていると思われます。

「鬼ごっこ」は地方によって、鬼ゴト、鬼アソビ、鬼モノなどといろいろな呼び方があります。ゴッコとかゴク、ゴを添えたのも、鬼ゴトのことで、ママゴトとか鬼ゴトのコトというのは、儀礼を意味します。鬼ゴトももとは鬼祭りという祭のときの、鬼の芸能の一つでした。その鬼祭りのおもしろい鬼の所作をまねしたのが、鬼

ごっこなのです。たとえば「鬼の居ぬ間に洗濯じゃぶじゃぶ」とか、「鬼さんこちら手のなる方へ」と、鬼をからかったり、反対に鬼の方からおどしたりからかったりすることばもあって、長い年月の間子どもの間に人気の変わらぬ遊戯の一つとなって、今では百種以上の鬼あそびがあります。

では、鬼ごっこのもとの鬼祭りとはどんなお祭りなのでしょう。鬼祭りというのは、全国の神社や仏閣で行われている鬼追いの信仰行事で、京都の吉田神社や福岡県太宰府天満宮の鬼燻祭り、仏寺では、京都盧山寺の鬼の法楽などが有名です。いずれも神様の功績を讃える演劇で、悪鬼は僧侶の加持祈禱によって調伏されます。すると今度は悪鬼は人々に祝福を与える鬼に変身してしまうのです。このように鬼には、邪悪なものとして追い払われる面と、異界から訪れて祝福を与えるという二つの面があると信じられてきました。

私たちの生活のなかで、鬼の出てくる、身近な今も行われている行事には、節分の鬼やらいがあります。節分というのは、一年のうちの立春、立夏、立秋、立冬は、いずれも季節が改まるときの、分けめのことなのです。

けれども立春の春だけをとくに重くみるようになったのは、旧暦では、立春から新しい年がはじまり、節分は一年の最後の日、大晦日となるからで、この大晦日の除夜には、疫鬼を追い払う追儺の式が行われていました。追儺の習俗は中国から入ったもので、文武天皇の慶雲三年（七〇六年）に疫病が流行し、百姓が多く死んだために鬼やらいの式が行われ、のち恒例の年中行事となったのは、文徳天皇斉衡元年（八五四年）以降といわれます。

その式法は「延喜式」によると、大舎人寮の舎人が鬼となり、舎人長の演ずる方相氏が黄金四目の仮面をかぶり、玄衣朱裳を着て右手に戈、左手に楯をもち、舎人長に従う振子という八名の児童は、桃弓、革箭、桃枝を持って、それぞれが鬼を打つのです。この所作が鬼ごっこにまねられているわけです。

追儺の鬼になる家は、鬼株とか鬼講などといって、特

定の家が定まっていました。悪鬼といえども鬼の役をつとめるときには、シオゴリ（汐垢離）をとって身心の潔斎をしなければなりません。

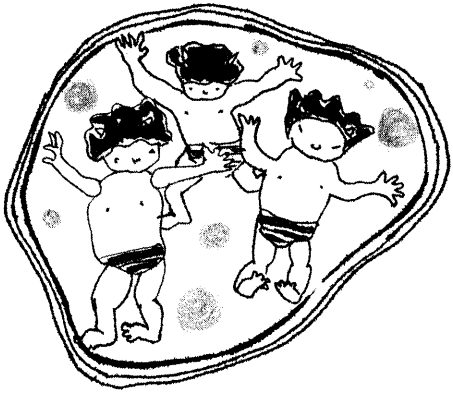
これらの除夜の追儺は、寺院の修正会などに行われるようになり、やがて民間にも福を招き鬼を追い払うという意義をひろめるようになりました。

日本には春のはじめに神が訪れて、人々に祝福をもたらすという信仰が古くからあって、その神を家に迎えて祭るために、ハライをする必要があったのです。この神を迎えることと、災厄を除くことが習合して、悪鬼をはらう行事の方が成長してゆきました。

節分の鬼やらいは、鬼追い、鬼打ちなどといって、災厄をもたらす精霊としての鬼を追い払い、豆で鬼の目玉をつぶすというのです。

鬼ごっこの他、子どもの世界には、昔話のなかで、桃太郎の鬼退治や、丹波の大江山の鬼など、たくさんの鬼の出てくる話に出合います。

鬼についての伝承は、時代により地域によってさまざまですが、海の向こうの中国では鬼（き）とは死者の魂を意味し、「鬼（き）は帰（き）なり」といって魂の帰ってきた形を表わすものでした。日本でもこの世に恨みを残して死んだ人の場合には、鬼とか天狗になると考えられていました。



「倭名類聚鈔」（承平年間）によると、鬼は隠（おぬ）がなまったもので、姿がかくれて見えない、「ものにかくれて」存在するのが鬼の性格といわれます。

日本の鬼の観念は、時代によってうつり変わっていますけれども、古くは怖ろしい形相をして人を食う怪物と想像されていました。その後、仏教や陰陽道の影響をうけて、人間生活をおびやかす空想上の怪物として擬人化されてゆきます。

身の丈は二・七m、髪は夜叉のように逆立ち、ひたいには牛の角がはえ、目は猿のよう、口角は大きく裂けて虎の牙をもち、肌は赤黒くて、人間と同じように体には動物のような毛ははえておらず、腰には虎の毛皮のふんどしをまとい、怪力をもっているけれども、ものは言わないといいます。

風神や雷神も古くから鬼の形相でとらえられていましたから、荒ぶる神と同類の超人的な精霊ともいえます。目一つ鬼など奇形的な像のイメージでとらえられています。

昔話の中に登場する鬼は多く、みなこのような怖ろしい怪物で、深い山の奥とか海のむこうの島など、われわれと若干の距離をおいたところに鬼は住むと語られてきました。

島国の日本は山地が多く、その山奥では、古来伝承されている山の神の異様な形相や、山人の強い力とか、さらに山岳修行の修験者の神秘さなどが加わり、また仏教の地獄の観念と習合して、「鬼に金棒」という金棒を持って死者を追う地獄絵のような鬼の姿が描かれています。

丹波の国大江山の「酒呑童子（しゅてんどうじ）」は、奥山に住む鬼共の大将で、都（京都）に出ては人を食ったりあばれまわっていたのを、源頼光やその家来、渡辺綱、坂田金時などが退治する話で、南北朝～室町時代に多く作られた怪物退治の代表作です。

「二人兄弟」とか「千里の靴」という昔話では、貧しい母親が三人の子どもを育てかねて、子どもたちを山奥に捨ててしまいます。捨てられた三人の子のうち、弟が

兄たちをはげまして、山の中の灯を目あてにたどっていくと、そこは鬼の家でした。鬼の家にはお婆さんが一人るす番をしていましたが、親に捨てられた子どもたちをかわいそうに思って、三人をふろの中にかくしてくれました。まもなく鬼が帰ってきて、なんだか「人くさい」といいますが、「今逃げていったからだ」とだますと、「それじゃあ」と鬼は千里の靴をはいて探しに出かけます。けれども見つからず、疲れて帰り眠ってしまいます。その間に弟は千里の靴を奪い、兄たちを背負って逃げ、無事に家に帰るという話です。同様な話は山梨県や鹿児島県奄美大島、喜界島などにもあります。

一方、海上の孤島の鬼のすみか、鬼が島の場合には、それが財宝にみちた常世の国とか、蓬莱の島という観念を習合した結果、鬼征伐に行った桃太郎は、金銀さんごを車につんで帰るということになります。

「桃太郎」や「一寸法師」は、ふしぎな誕生と奇瑞を説く話で、主人公の偉業としての鬼退治は、代表的なモチーフ「桃太郎の事業」となっています。

また危難の克服を説く「三枚のお札」では、護り札が主人公の危難を救う話で、鬼婆に追いかけられた小僧が「山出ろ」、「川出ろ」などと唱えながら背後にお札を一枚ずつ投げると、にわかに山や川や火があらわれて、鬼婆の追跡をさえぎり、小僧は無事に逃げきることができる話です。お札の御利益はこの他岩とか海、砂山、茨の藪、剣の山などを出現させる場合もあります。

「鬼の子小網」は、鬼にさらわれた女性を助け出すという厄難克服の話で、娘が鬼にさらわれたのを爺が探しにゆき、鬼の子の手引きで鬼の家に着き、隠れていると鬼が帰ってきて「人臭い」といい見つかってしまいます。娘と鬼の子の気転で危機をのがれ、すきを見て船で逃げます。追いかけてきた鬼は、海水をぐんぐん飲んで船を吸い寄せます。あわや一呑みに呑まれようとしたとき、鬼の子がとっさに娘の尻をまくり、杓子で尻をぺたぺたと叩くと、鬼は笑いだして海水を吐きだしたので無事に逃げ帰ることができました。女性性器のもつ邪悪をさえぎる力と、呪具としての杓子の力に依ったものと考

えられます。脱出に重要な役割を果す鬼の子は、半人半鬼ともいえるもので注目すべき存在です。

また「鬼をひとくち」という「和尚と化物」とも呼ばれる話は、和尚と鬼が化けくらべをして、鬼が小さなものに化けたときに、和尚がそれを一口に食べてしまうという話です。人に崇敬と畏怖の念をもって祀られる神が、その畏怖のゆえに鬼とも呼ばれ、仏者と術くらべをして破れていく様子には、中世以来神々の落魄してゆく姿がみられます。この話には、鬼をも一口で征服する和尚をたたえるとともに、鬼としての神々の威力が失われて後退していくさまが、多分に笑話化されています。

人が鬼になる、または鬼という名のもとに行為することが、魅力的な説話伝承の一分野を形成していることは、注目すべき庶民精神史の問題といえましょう。

疾風迅雷のような鬼の行動性は、盗賊集団のイメージを重ね、天狗は山伏の貌と重なり、激しい女の情念は鬼女への変身を求めて、般若の貌へと変わる面をもっていることなどが、「目に見えぬ」世界の鬼の存在を大きく変化させてゆきました。

鬼には邪悪なものとして追い払われる面と異界から訪れて祝福を与えるという二面性があることは、次の伝承にもみられます。

群馬県前橋付近で、二月八日のオコトの日には赤城山から鬼が来るといいます。その鬼は庭先に立てる目かごを上向きにしておけば、お金を入れて行ってくれるというのです。鬼は怖ろしいばかりでなく、ユーモラスな面ももっているようです。

（日本民俗学会会員）

〈鬼〉をめぐって (2)

天邪鬼な、ある女の子との鬼遊び

湊　良子

私は、大学の児童学科で保育学を学んだ後、どこか子どもと出会える場所を探していて、ひょんなことからある区立教育相談室の相談員募集を知りました。一年契約の非常勤職ですが、幸か不幸か勤め出して早や六年半になります。今回、「鬼」という題を与えられて私の頭にすぐ浮かんだのは、天邪鬼と呼ばれたある女の子のことでした。その子はピンク色が大好きでしたので、仮に桃子と呼ぶことにします。相談室では保護者の相談を受けて、平均週一回五十分の親面接と、子どもの遊戯治療を行なっています。私は、子ども担当のセラピストとして桃子と出会いましたが（別に親担当のセラピストがいます）、プライバシー保護と読み易くするという観点から、事実に多少手を加えました。読者の皆様には桃子のお話としてお読み下されば幸いです。

☆　桃子との出会いと鬼ごっこ

桃子の母親は、桃子が母に対して反抗的なので、これから幼稚園に入園して集団に順応できないのではないかと心配され、電話予約して桃子と来談されました。次は記録から、

《私が桃子に自己紹介してプレイルームへ誘うと、すねた表情で聞いていた桃子はすぐさま私をぶって、一人玄関に戻り、「帰る！」とわめく。私は「心配なの？」と声かけしてみるが、とりつくしまのない感じ。母はそんな桃子の気持ちを察して宥めたり、諭したりする風もなく、いつもこんな具合いなんですよ、とこちらの出方を窺うように視線を向けられる。私は困惑してしまう。親面接者が母を先にプレイルームに通すと、その母を追って桃子も入室し、母のペンを奪ってなぐり描きを始める。私に描かせた花の絵が気に入って、桃子もその茎や葉を描きだす。その後、母が別室に移っても気にせず、私と二人でお弁当を作って森へ行き、楽しく遊んだ。……

終了時間になり、迎えにきた母が突然入室するのを見た桃子は、慌ててハウスにもぐりこみ、私に「狼になれ」という。私が、「狼だぞ」とそれらしいしぐさをして近づくと、桃子はぱっと飛び出して母に抱きつく。なおも狼やってというので私が応じると、桃子の顔は恐怖で歪み、怒って私を力一杯叩く》

桃子は四歳。色白で愛らしい顔立ちをした、おませな感じの女の子です。来室時に桃子が怒って入室を拒否したのは、相談室に対する（又連れてきた母に対する）不信からであり、私が狼そのものに見えたのだと思われます。ここで桃子は母に抱きつきません。ところが、帰りには私（つまり母以外の大人）と楽しく遊んだことを打ち消すように、私を狼にして来室時の状況を再現し、今度はしかと母にしがみついて母の許に帰ってゆきます。

桃子の行動は随分と反抗的で乱暴に感じられますが、その奥には不安や脅えがあり、母親への気遣いをかなりする子どもとの印象を持ちました。

翌週、桃子は私の挨拶をうけると黙って自分からプレイルームに入室して飛び出します。「ここ（相談室）は、桃ちゃんが好きなことをして遊んで桃ちゃんらしく元気になるためのお手伝いをする所。子どもの心配を助ける所よ」という、私の説明を静かに聞き来週も来る約束をして帰ります。

その次の回、桃子は色紙でほほえむ鬼を三体作って白板に張り、その周りを幾重にもペンで囲い、鬼の家族と称します。洞穴で仲睦まじく暮らす鬼達と見え、ほほえましく思う反面、鬼で表す桃子の心情を思いました。

当時、桃子は二年保育の年少組に入園し、長いこと母に手をひかれて登園するものの、入室を拒否して廊下でひっくり返って泣き叫び、机の上で寝て過ごす等、先生方の手を相当煩わせていたようです。寛容な先生方で、有難く思いました。

母に対する反抗を幼稚園でも実行していたものと考えられますが、この反抗の仕方は、母の幼ない頃と瓜二つであることが後に明らかになりました。母は集団の枠にはめられることを極度に嫌う大変美しい方で、その昔学生運動に没頭していたという、今は物静かな旦那様と恋愛結婚されています。反体制、反秩序が、基本的な鬼の特質であるとすれば[注1]、両親共に、鬼の要素を十分持つ家庭であるわけです。

私が桃子と会っていて気になったのは、桃子がはでな反抗で自己主張する一方で、私に対して本当に欲しい物や気になる事を直接いえず、ほのめかすような遠回しないい方をして自分を出さない所や、こちらの注意をひこうとして、わざと危ないことをする彼女の護りの弱さ、危うさでした。

桃子の怒りに接すると、つい私の方が不安になって宥めようとしてしまうのですが、そんな私自身の傾向に気づいたことから、私自身が彼女の攻撃性を受けとめようとしていると、次のような遊びが起こりました。

《桃子はドロドロの小麦粉粘土を私の腕に「ホーラ、ホーラ」と脅すように[注2]塗りつけて、「とどめー」

といって二の腕まで塗る。私が「やられた」というと、桃子はさっぱりした表情をする。そのあと二人して、ぬるま湯で手を洗う。》

このようにして、来談から半年程経った頃から、鬼ごっこを楽しむようになりました。それは、迎えにきた母を基地、私を鬼にして、桃子は母に触れていれば安全というものです。

桃子の中で、私を鬼にしても途方もなく怖く見えることはなくなり、内的な桃子を受けとめ守ってくれるお母さんに対する信頼感が昂まったことが推察されました。出会いの日の最後にみられた私を狼にする遊びと異なり、私は鬼を演じながら、桃子と母との自然なほほえましいやりとりがみられたことに大きな喜びを感じました。

プレイルームの中では、ビックリ箱や既成の鬼の面の身体部分をこしらえます。（写真）私に本当にびっくりするか、怖いか確認しながら、彼女の内なる不安や怖れに形を与えて対象化、客観視する作業がくり返されました。

☆ 天邪鬼な桃子の隠れん坊ごっこ

《「こんにちは」玄関で私が挨拶すると、桃子は「うるさい、その顔やめて！」と怒る。私が「あら、嫌だった？」と聞くと、桃子は甘え声を出して「ねえ、何か頂戴」とねだる。》

これは、桃子五歳の頃のある日のやりとりです。こまっしゃくれて生意気、ああいえばこういう桃子の一面がよく表れています。しかし、来談後一年経過し、それとは別の、しみじみと情感のこもった話、率直な物いいがボツボツ出てきていました。

《小麦粉粘土をつくりながら、桃子「四歳の時、テーブルの下でよくお塩をなめたね。おいしいの。甘ーいの。沢山食べた。たまにね。……どんな時って……」、「今も食べるわ。おいしいわ。」私が「それ反対ことばだ」というと、桃子は一旦否定しておきながら、「好きの反対は？」「おいしいは？」「大好きは？」と次々質問してくる。》

母によると、桃子はことばを覚え始めた頃、おせんべをおべせんというようにひっくり返していうため、母に通じないとじれてヒステリーをおこす。長じて好きな童謡も、お手手つながないでと歌うような子だったそうです。私には、母の注意・関心をひくための苦肉の策だったし、精一杯の自己主張だったのではと感じますが、母にしてみれば、ひねくれ者でへそまがり、人の意に逆らう天邪鬼と映ったとして無理からぬことです。

一緒になって塩をなめ、彼女の塩辛(からい)い辛(つら)い想いを味わい、反対ことば遊びをしていくうちに、彼女の方から、天邪鬼の意味を尋ねます。そうして、辛く寂しい時、人に対して働く天邪鬼な心とそれに反する本当の気持ち、願いに少しずつ触れてゆくことができるようになってゆきます。

この頃から、帰り、廊下の片隅で桃子は私の膝許にうずくまり、迎えにきた母に捜し当ててもらう隠れん坊が始まりました。母に見い出されるのを信じてじっと受け

身で待つ桃子の姿が私には大変いとおしく感じられ、母に抱き上げられる桃子の満ち足りた表情に、とうとう本当に望んだものを手に入れたね、といってあげたくなりました。

ところで、この隠れん坊の鬼は一体誰でしょうか。まずは子どもを見つけにくる母が鬼といえますが、子どもが見つかった瞬間から鬼は私で、母が鬼に奪われた我が子をつれ戻しにきた、惑いは母鬼が子鬼を捜しにきたといった感じを私は持っています。

以上で、桃子の話はおしまいです。

桃子は二年程相談室に通ってから小学校に入学し、初めは寡黙でしたが、友達もできて元気に登校していきました。桃子の母は、今までに充実感を感じられずに生きてきましたが、ここにきて目の前の子どもと関わる楽しさを味わえるようになりました、と語られました。

ふり返りますと、親に反抗し、へそまがりで天邪鬼だった桃子が、随分素直で率直な物いいをするようになりました。

しかし、全く素直な子になってしまったかというと、とんでもありません。今も天邪鬼な怖い物好きな面は、むろん持っています。最近聞いたところによると、桃子は今、吸血鬼の話に凝っているそうです。私としては、話のおもしろさなど是非聞きたいのですが、聞いたところで「ダメ！これは私の秘密」といわれてしまいそうな気がしています。

（注1）　馬場あき子「鬼の研究」（三一書房）

（注2）　桃子の母が桃子を抱いて、「ホーラ、海に落とすよ。サメが食べるよ」と無意識に脅すのを見たことがあります。

（教育相談室）

〈鬼〉をめぐって (3)

鬼のまま すてきママ

松井るり子

鬼のはなしを読むなら、田辺聖子『鬼の女房』（角川文庫）がいい。『今昔物語』『古今著聞集』『篁物語』等々から鬼の話が集められ、そこここで鬼が暴れ回っている。怪力がありそうな毛むくじゃらの大男にツノが生えキバが生えたむくつけき鬼も怖ろしいが、女の鬼はもっと怖い。男鬼はお酒飲ませて美女でもあてがっておけば何とかなりそうな気がするが、女鬼の話は我がことのようで怖い。

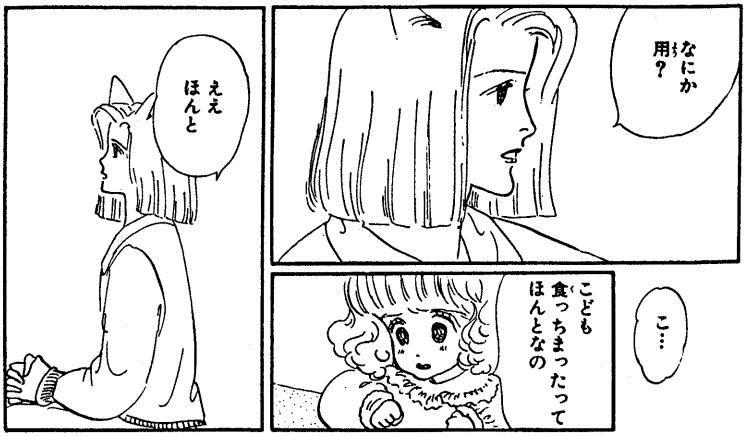
例えば東山の人食い鬼の話。身寄りのない宮仕えの若い女が、夫もなく妊娠してしまった。ここで失脚したら野たれ死にである。女は気強くふるまって気どられぬようにし、一人でこっそり山奥で産み落して捨てて来ようと決心する。月満ちて出産のきざしがあり、女の童一人を供に東山の方に行くと古い家がある。ほっとして休んでいると頭の白い老婆が現れて同情し、親切にお産の世話をしてくれた。捨てようと思っていた赤ん坊だが、かわいさに情が湧き、乳を飲ませたりして数日たった昼寝の折りふと目を覚ますと、老婆が近々と寄って赤子を眺

めている。老婆は気付かれているとも知らず「穴甘気（アナウマゲ）、只一口（タダヒトクチ）」（田辺訳「何とうまそうな、ただひとくちに、わんぐりと……。いひひひ」こういう語り口が古典拒否症を治してくれます）とひとりごとを言っていた。この老婆は鬼だったと悟った女は女の童（めわらわ）に赤ん坊を背負わせて走りに走って逃げた。子どもは里子に出したという。

長く生きた老婆が鬼になるというのは、餓えて人肉嗜食者になったのかも知れないと田辺氏は考察するが、そういう気持ちの芽がばあさん途上の私に全くないと言い切れないところが怖い、二番目の子が生まれたばかりの頃、三歳だった娘が赤ん坊をなでたりさすったりしながらひとりごとを言っていた、「かわいこねっ。たべちゃいたい。」幼児がこういうことを言うということはすなわち私が普段そう言って見せているということに他ならない。全く自覚していなかったのだが、そう思って考えてみればもしかすると言っていたかも知れない。そうでなくても私は人前でもつい赤ん坊を抱きしめ頬ずりしつまんだりなめたりくすぐったりしてしまうので、言葉にせずとも全身で「食べちゃいたい」と言っていたかも知れない。

かわいさ余って食べたいくらいが一歩進んで、うさぎや猫のお母さんがひどく脅えると自分で産んだ子を食べてしまうあの気持ちは妙にわかったりする。大島弓子『ばら科』（白泉社『綿（わた）の国星（くにぼし）』6巻収録）の佐山猫のお母さん。三匹生まれた子猫のうち二匹がもらわれて行き、残りの一匹を「くっちまったってほんとなの？」とこのマンガの主人公のチビ猫にきかれて「ええほんと」と遠くを見るような目で答える編物好きの母さん猫が好き。「そんとき頭からくったの　しっぽからくったの」「じゃ…じゃあ味は」ときかれても「夢中だったから覚えてない」とだけ言う。はたから見れば猫肉嗜食猫とでも鬼猫とでも名付けられようが、これ以上子どもを取り上げられまいとして「くっちまった」彼女の気持ちはよくわかる。東山の鬼婆の昔にも、これと同じ悲しみがなかったとはどうして言えようか。

あるいはまた年老いた母親が「樹の上の鬼」になる話



▲「ばら科」より

もある。遠い昔いとおしんで育てた二人の赤ん坊も壮年となり、たくましい猟師の兄弟となった。息子たちの関心は母から離れて活力ある外の世界に向かい、反対に老母の心は閉ざされて過去にさかのぼる。夢ともうつつともつかぬ想いの中で「憤怒にも似た愛執の念」のみが燃えさかり、その情念はついに老母を鬼と変ずる。母は猟に出た息子たちを樹上で待ち構え、髻をつかんで上に引き上げ、食らおうとした。「人ノ祖年痛ウ老タルハ必ズ鬼ニ成テ此ク子ヲモ食ハムト為ル也ケリ」。今昔物語の作者はこう断定する。

私にも小さい息子が二人いるが、こんなにかわいい子たちがやがて見上げんばかりの髭面の男になり、私のことなど忘れてギターだバイクだ女の子だ（例えばの話）等々に夢中になる日、のけものにされたように感じて鬼にならないとどうして言えよう。

いっそのこと女鬼を正視してみる。草野心平の『鬼女』（新潮文庫『草野心平詩集』）はこうだ。「うるしの髪を右手でかきあげ。うすら笑ひと青い頬。血糊の口

をがぶがぶすすぎ。……髪毛押しわけて角がたち、水鏡の笑ひの口に牙がのび。……ぎいぎやつぎやあ。おひかぶさつた崖にこだまし。」この鬼はきっともともとがタヌキ顔のおかちめんこではない。漆黒の髪、ぬけるような肌。美しい女が鬼になって食らい、血の紅で口のまわりを彩るなんぞ、きらびやかなほど壮絶な図である。昔話の鬼女『牛方と山姥』の山姥は魚を「みりみり」食べ、牛を「みちみち」食べ、噛み切れぬ皮を「にちゃにちゃ」噛む、『飯食わぬ女』の鬼女は夫の友人の男を「がしがし」食い、『鬼の妹』のあせっくわは牧場の牛を横抱きにして音もなくその血を吸いつくす。（関敬吾『日本の昔ばなし』1～3、岩波文庫）

こわいねー。女の鬼は怖い。『鬼の女房』の中の嫉妬に狂う鬼など見ていると、私自身と切り離されて獄の中に居る大悪人ではなく、今の私の延長線上に居るんだなと思う。大変だ。私も心して鬼と変じぬよう、「上手な子離れの仕方」「母親の自立」の本など読んで予習し、自制心のコントロールに励み、鬼などとは程遠い慈愛に満ちた母にならねばならぬ、と思う。

ところがせっかく私ががんばって忌避している鬼女であるのに、子どもは間違いなく興味を示し、寄って行くのがけしからんことである。大西広文、梶山俊夫絵『鬼が出た』（福音館書店「たくさんのふしぎ」一九八七年二月号）を手にした時、四歳の娘は一枚の写真に吸い寄せられるように見入っていた。千葉県光町の鬼来迎（きらいこう）というお祭の鬼。「奪衣婆（だつえば）」が小さな男の子を抱っこしている。「抱かれた子どもは怖くて泣き叫んでいるが、これで病気が追い払われる」と解説される。写真の子は後ろ向きで泣き顔が見える訳ではないが、娘は何か感ずるらしい、「この子どうしたの？どうしたの？」と何度もきいてくる。奪衣婆（だつえば）は例えば京都八坂神社の節分の鬼のようなどっしりした金襴（きんらん）の着物につるりとした面をつけた、殿様のような豪華な鬼ではない。夏祭りなのか、単（ひとえ）の着物をさらりと着て数珠を手首に巻いている。もつれてぺたんとなった髪、土気色のでこぼこの面の額にツノが一本、キバも上向きに二本生えているが、怖いという

▶鬼来迎（きらいごう）の奪衣婆（だつえば）

より泣きべそ顔の弱虫のようにも見えてしまう。「婆」という字のついた鬼だからもしかすると女鬼だろうか。初めは子どもを取って食っていたが、自分の子を隠されてから母親の悲しみを知り、以後母と子の護り神と転じた鬼子母神のことなど思い出す。泣かれてでも子を抱きたい。泣かせる悪者になってでも病気を追い出して子を守りたい。一見怖そうでよく見れば泣きそうな顔した婆さん鬼かなあと思いながら、娘と一緒に私もこの写真に見入った。

もうひとつ娘と見とれた絵本は、谷川俊太郎文、タイガー立石絵『ままです　すきです　すてきです』（福音館書店「年少版こどものとも」一九八六年十月号）。プロレスラーみたいな名のこの画家は、同社の「たくさんのふしぎ」などでよくエッシャーばりの不思議世界を開いて見せてくれる人で、好きじゃないのに心ひかれる存在である。うむ。断じて好きじゃない。（とムキになってしまうのが要するにファンである証拠だろうか。不安である）

この本はまず表紙が衝撃的だった。そこに描かれた「すてきまま」がトラ皮のワンピースを着て腕輪をつけ、裸足でタカシマヤの包みと買い物バッグを抱え、坊やの手を引く鬼のお母さんだったから。金髪からにょっきり白い二本のツノ。ヘ文字の笑い目は実にすてきで二本のキバもまたすてき。道行く人々も皆鬼で、ツノ生えバットのような金棒かついだ労務者風赤鬼青鬼に混じって、制服着て学生鞄下げた乙女鬼や、背広着て角封筒持ったビジネスマンスタイルの黄鬼がいる。この黄鬼、首飾りぶら下げて扇子ほどのコンパクト金棒を握っているのが御愛嬌。すてきままと手をつないだ子鬼はママとおそろいのトラ皮パンツからおへそをのぞかせ、とがった耳に不細工な鬼面の坊やだが、いかにもこのママが誇らしいというように笑いつつ、つないでない方の手を上げて私に合図する。

合図された私はうろたえる。このママに負けたと思ったからだ。鬼の姿をした鬼はそれでよいが、人間の姿をした鬼（私）は無限に怖いからだ。キバもツノも露出してしまっていれば、それなりに子どもの方にもやりようがある。だけどいらいらした時の私ときたら、キバやツノをむりやり押し込めて怒るまいと優しげにふるまう。これでも一応鬼になるまいという心構えだけはあるのである。しかし結果的にはかえってそれでスゴミが漂ってしまい、それによって子どもを支配してしまう。かわいそうな娘。

絵本を開くとおはなしではなくてしりとりが始まる。くるくるよじれる紙リボンに書かれるしりとりの言葉と、絵の奇妙な連続。隠し絵。先の坊やがページを渡り歩いてしりとりを進めると、本の中ほどに「ままです」「すきです」「すてきです」も出て来て、ここでも母子はやっぱり手をつないで歩いている、鬼の坊やが長いしりとり遊びの中にうまく隠して言いいたかったのはこのことなのだ。鬼のママが鬼のままの姿で、それでも好きにならずにいられないすてきなママで。変にツノカクシした私のような母を持つ娘より、鬼のママとすっきり和解しているこの坊やの方が幸せかも知れない。五歳だっ

た娘はこの子鬼を「へんへんこぞう」と名付けて愛していたが、私もこの変々小僧とお近付きになりたいと思った。

鬼の母とみごとに和解しているのは、ロシア民話『どこかわからない国のわからないもの』（オクスフォード世界の民話と伝説ロシア編、講談社）のハトのマーシャ。彼女は絶世の美女でまたとないほどの絹の絨毯の織り手である。それを知った王様が彼女に夢中になり、手に入れようとしてその夫である猟師のペトルーシカを亡き者にするため、無理難題を吹っかけて来る。問題の二つ目までは「何でもないわ」と解決するマーシャも、三つ目の「どこかわからない国の何かわからないものを持ち帰れ」というのは一晩中考えて魔法の本も調べ、鳥やけものや魚たちに尋ねてもわからなくて結局夜が明けてしまう。そこでマーシャは夫に毛糸の玉と刺繍したタオルを渡して、糸玉の転がる方に行き、どこへ行ってもそのタオルで身体を拭くように言う。

糸玉がペトルーシカを案内したのは、人食い魔女のババ＝ヤガーの小屋だった。糸を紡いでいたやせた老婆は彼を見るや「へっへ、へっへ」と笑い、晩飯にお前を食べてやると言う。彼は怖れずに、ほこりまみれはおいしくないから体を洗わせて下さいと物わかりのよい食べ物役をして見せ、タオルで体を拭く、するとババ＝ヤガーはその刺繍が娘の手になるものと知り、娘婿への無礼をわびて歓待する。おはなしは続くがババ＝ヤガーのおかげでどこかわからない国のわからないもの（姿の見えぬ万能の召使い）も見つかり、最後には夫婦で幸せになる。

マーシャは自分の母が実は人食い鬼のババ＝ヤガーだということを、できれば夫に知らせたくなかったのではないだろうか。母の所へ行けば何かよい知恵があると知りながら、何とか自力でやってみようと夜通し考えたり調べたり尋ねたりする。それでもわからなくて、いよいよ夫を産みの親に会いに行かせねばならなくなった時、見る者が見ればマーシャの仕事と一目でわかる手技（てわざ）の品を持たせて、あとはなるようになるだろうと、自分を捨

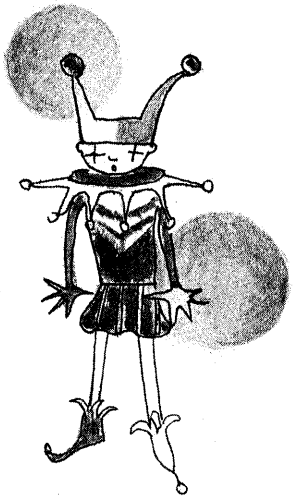
てた優しいあきらめのようなものを糸玉に託す。

マーシャの糸玉は夫をとんでもない化物のところに連れて行った。いきなり「ロシア人の血の匂いがする」と迎えられても妻の刺繍の効力を信じて逃げたりせず、娘婿をわかった後の態度の豹変もあざ笑ったりせずに、妻のおかあさんとしてごく自然に悩みを打ち明ける。悪い王様のような単なるメンクイ男なら、ババ＝ヤガーを目の前にして今は美しいマーシャも年を取ったらかようにすさまじい鬼ばばあになるのかと恐れをなし、落胆することだろう。ペトルーシカも若い夫としてできれば考えたくないことではあろうが、毛糸の玉がひとりでに老婆の小屋に転がって行ったように、ハトのように穏やかで優しいマーシャもその母のような存在への途上であるかも知れぬことを、時の流れは彼に教えるだろう。少なくともそれら二つが切り離された別物ではなく、同一線上の二つの端っこにすぎないことを知らねばならない。幸いペトルーシカは女の上っつらの一皮だけを見る男ではなく、絹織りの絨毯、毛糸の玉、刺繍のタオル（マーシャの技）、糸紡ぎ（ババ＝ヤガーの仕事）といったもので表現される女性族特有の知恵の前に尊敬と信頼の念を抱いていたので、妻の母のおどろおどろしいようなところも含めて女というものの特性を全てあっさり受け入れた。その純粋な強さこそが彼を救ったのだろう。マーシャもまたここで自分の母は鬼のままとりつくろいもしないでいるが、問題解決能力では一枚上手のすてきままだと言っている。そのメッセージに私も耳を傾けたい。

（つくば市在住）

Mくんと私

吉岡　晶子



四月に三歳児の担任になりました。私にとってはじめての三歳児、一人一人と向き合う毎日は、驚きやとまどい、発見の日々でした。

Mくんは三月生まれの三歳になりたてのほやほや、クラスの中でも体が小さく、歩き方もまだヨチヨチした感じが残っている子でした。入園して間もない頃は、一人でしゃがんでレールを黙々とつないでは電車を走らせたり、園庭にすわりこんで砂利をいじったり、ままごとコーナーでテーブルの上にお皿を並べたりしていました。「先生、先生」と呼ぶ声はあまりありませんでした。

五月になり少し幼稚園に慣れて来ました。Mくんは、時々「先生」「こっち来て」と私に声をかけるようになりましたが、しばらくすると、あらあら、またやられたと、つい思いたくなることを次々とやるようになったのです。ブロックや他のおもちゃがたくさん入ったカゴを次々にザーッとひっくり返すのです。そして私の方をチラッと見るのです。帰る

時になると、きれいに片付いたままごとのお茶わんやお皿をあちこち散らかしたり、ボールをいくつも外に投げたりもしました。私は「こわれるからもうやめましょうね」「使えなくなっちゃうね」とか「大変大変ひっくり返っちゃった。拾いましょう」などと言いつつ「私は試されているのでは？」という思いでおもちゃを拾い片付けていました。そのうちMくんの顔を見ているとまたやりそうだというのがわかるようになりました。私をチラッと見たり、「ぼく、今からやるぞ、どうだ」という表情になるのです。そして私が駆けつける、という日が何日も続きました。Mくんはめちゃくちゃにすることを楽しんでいるのか、私を呼んでいるのか。でも危険を伴いそうな時には何はさておき止めなければなりません。迷いながらの日々を送っているうちに夏休みを迎えました。Mくんの〝ひっくり返し〟は少しずつ減って来ていました。

二学期がはじまりました。第一日目、Mくんは私のスカートをつかんで離さず、ずーっとそばにいました。「先生あのね、Mちゃんね……」と夏休みの楽しかったことを話してくれました。おもちゃをひっくり返したり倒すこともありません。これは調子の良いスタートと思っているうちに、しばらくしてからドキッとする言葉を聞くことになりました。「先生」と呼ばれて行くと「先生きらい、あっちへ行って」と言うのです。「まあ、先生はMくんのことと大好きなのに…」と言いつつ何か邪魔したかしらとか何か言いすぎたことがあったかしらなど思いました。それからは度々この言葉を聞かされました。友達に砂利を投げているのを止めれば「先生きらい」、水道の水を出して周囲を水浸しにした後始末をしても「先生きらい」。砂場で遊んでいる時に袖口を上げようと近づくと「先生あっち行って」なのです。でもそう言いながら手を出して私にされるままになっていました。されることがいやだったのでなく、近づいてくる人は〝ぼくに何か言いに来るの

か〟という警戒の気持ちだったのでしょうか。袖口が濡れようとそーっと見守り、Mくんのしたいようにさせた方が良かったのでしょう。それまでに、それほど声をかけたり手を出したつもりはなかったのですが、Mくんにとっては余計なことが多かったのでしょうか。「Mくん面白そうね」とか「Mくん、すごい」などの声にも、口癖のように「あっち行って」ということもありました。誉め言葉も認め言葉も彼にしてみれば必要なく、そーっとしておいて欲しかったのかも知れません。つい先を見越して先走ったかかわりをしていたのかと反省し、危険なこと以外は見守ることにしました。

この頃、母親に対しても同じ様に「あっち行って」と追い払ったり、「ママきらい」を連発していました。自分がしていること、しようとすることをさえぎるものをことごとく排除していたのでしょう。彼の小さな抵抗でした。それでいて遊び相手は私で、「先生、遊ぼう」と呼ばれるのですから複雑でした。

そして十月。「先生きらい」が少なくなりました。「先生（きらい）……」と続きそうになっても言いません。自分に都合の悪いことを言われると私を手で打つことがあります。数回私を叩くうちにだんだん力が弱まりそのうち気分を変えて「先生、お山に行こう」と言ったりするのです。突然頭を私にぐいぐい押しつけてくることもあり、私も一緒に押したり引いたりお相撲になります。

ダンボールの電車が今のMくんの宝物。「きょうは丸の内線」「きょうはブルートレイン」と毎日変えて遊んでいますが、「先生、乗ってよ」「先生、この駅で待ってて」「先生、遊ぼう」と声がかかります。今後、Mくんと私の歴史はどうなって行くのやら……。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

私の出会った人々(六)

安島　智子

◇幻聴におびえる女の子◇

〈小学校二年生の舞子ちゃん（仮名）のこと〉

舞子ちゃんは一人の時、「コラコラ」と言う声や、「キンコンカンコン」という音が聞こえ、そのためにおびえているということで来談した。三歳の時もお手あらいで「こらこら」と言う声が聞こえて大泣きをしたことがあるそうだ。

舞子ちゃんはどんなお子さんで、どんな状態にあったのであろうか。

家族は、お父さんとお母さんと、三歳上のおねえちゃんとの四人家族である。あかちゃんのときから、おねえちゃんとふたりきりで留守番をしていることが多かったそうだ。

お父さんは娘たちをとても可愛がり、日曜日はお父さんが娘たちの面倒を見ていたと言うことだ。

《生育歴・現症歴》

普通に生まれて母乳で育つが身体は弱かった。二歳できゅうに普通に話し始め、赤ちゃん語はなかった。

ボール遊び、ブロック遊びが好きで砂遊びやままごとはしなかった。神経質でほんの少しぬれても拭かないと気がすまない。幼稚園に入園した年、夜中に急に泣く日が何回あった。小学校一年生のときに、学校にいくとお腹がいたくなったり、円形脱毛になったりしたこともあった。自分の言いたいことが言えず、すぐにメーメー泣いてしまう。家ではちゃんとした言葉づかいだが、外では「おまえ何してんだ」といった言葉を使っていることがある。来談時に再び声がひんぱんに聞こえて来るようになった。

この声はいったいどういうものであろうか。私には、この声は舞子ちゃんが無意識に開かれていた状態にあって、本人の内界に収められないことが声や、音となって聞こえてきたものと思われる。「コラコラ」は表出の禁止の声であり、「キンコンカンコン」は表出の願いが音となって聞こえてきたのではなかろうか。

箱庭のプロセスからこれらが解決されていく道のりを見ていきたいと思う。

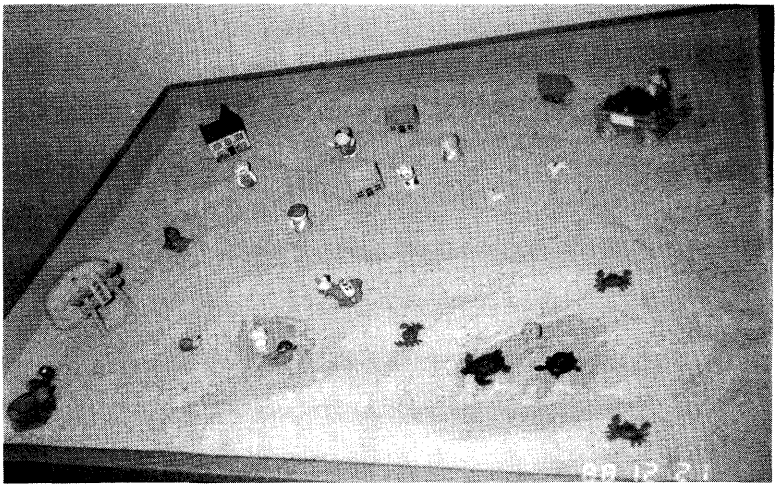
〈初回のようす〉　入口で元気な男の子に出会い、ビクッとしたようすだった。なかなか遊ぼうとしないことや、こちらからの話しかけには何と言って良いのか解らないといった感じを受けたので箱庭に誘ってみると、こっくりうなずいた。

ややしばらくじーっと箱庭遊具の棚をみていてなかなか取り出さない。やっと取り出したのはタコだった。タコを置いた後はピョンと飛んだ。可愛らしいしぐさだが、どこか不自然に感じる。続いてロバ、タコ、カタツムリ、カエル、家を置き、人形、六地蔵、鳥居をおいて「できた」と私を見た。その後粘土。うさぎの顔（大きい顔と小さい顔）とにんじんをつくった。

箱庭1

箱庭のなかはエネルギーをあまり感じない。繊細で無意識に

開かれている。また六地蔵は救済を求めているようにも受け取れる。タコを最初に手にしたが、これは攻撃的なものや悪の表出（タコが黒いスミを吹くように）が抑圧されているということなのか。ロバが湖を覗き込んでいるのも印象的で、山羊が跳ねている感じがこの子らしい。ロバ、タコ、カタツムリもこの子の姿と重なった。父親像は枯草の土の香りをかんじる。父親は実際にも母親的存在となっているのであろうか。また左隅のカエルはどう変化するのか解らないような母親像でもあるのかもしれない。そのような対象関係の不確かさはこの子自身の不確かな状態や自我境界の弱さとかかわっているものと思われる。またそれ故に、この子の内なる世界の深さとの交流がおきているのではなかろうか。



▲箱庭１

舞子ちゃんが置いた箱庭からこのようなことを感じて治療が始まった。

—遊べなさから、遊んでみようかな—

二回目には「なにして遊ぼうか」と尋ねると、「わかんない」と言ったり、「遊びたいおもちゃある？」と尋ねても、「ない」と言っていた。たまたま前に遊んだ子のプラレールがあったのをやってみたが、つながらな

い。苦しそうなので、「ここまでにしようか」と言うと、ほっとしたようだった。

三回目は、攻撃性が水路づけられて対象に向かい、それがしっかりと受けとめられる体験ができればと思い、サッカーゲーム・オセロ・羽が吸いつくバドミントンに誘ったが、これは楽しそうだった。

五回には、「今日は何しよう」と言ってみると、「あれなあに?」とパン屋さんのコーナーセットを指さす。遊んでみようかなと思えたのかと嬉しかった。

六回目には、ウルトラヒーロー大決戦ゲームを選んだ。戦う相手の怪獣は一つにした。戦いになると、代理に戦わせるカードをつかい、自分では戦わない。怪獣と戦うのが恐いのだろうなと思った。

(母親面接から。おねえちゃんたちと遊ばなくなり、無理をしなくなった。)

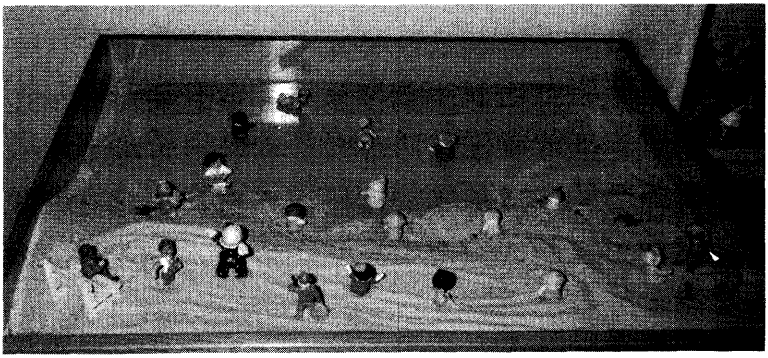
—箱庭・内的世界の進展のはじまり—

箱庭をするほうが、楽で自然のようだった。七回目頃から、毎回箱庭を真っ先にすることが続いた。一連の作品を見ていきたいと思う。

箱庭2

砂を動かして、大きな海を作り、赤ちゃんを二つ置いた。右下の三人はお父さんと、お母さんと赤ちゃん。新しくお父さんとお母さんの関係を求めているのであろうか。

この回は魚釣りゲームで魚をたくさん釣っ



▲箱庭2

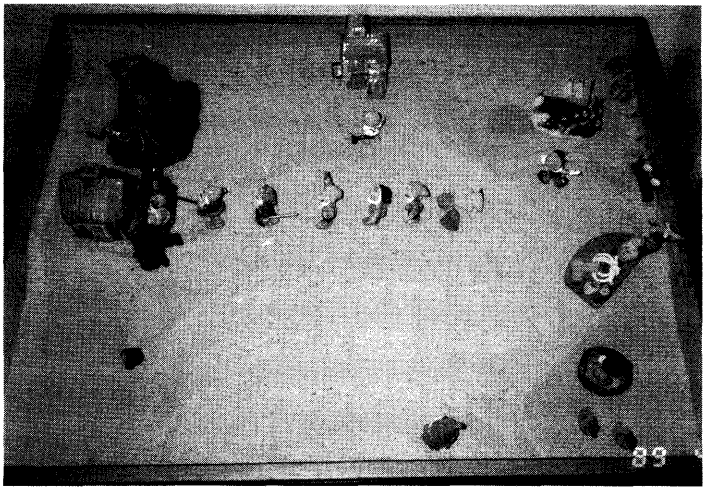
た。箱庭をした後、やりたい遊びをするというパターンで各回が進んだ。この頃は特にボーリングがおもしろくて、びんをいろいろな形に並べては、ボールを転がし倒すことを二人で交互にやっては笑いころげていた。

（母親面接から。お父さんの添い寝を拒否。いじいじしなくなり、いやなものはいやと言うようになった。やりたいものは本当にやりたがる。）

—箱庭・小人さんたちのおしごと—

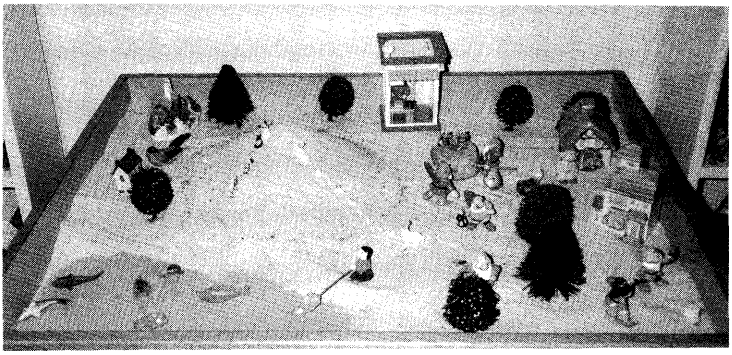
箱庭3

小人さんたちが、門をくぐってむこうの世界（地下世界）へいこうとしているようだ。何を掘り当てて来るのであろうか。



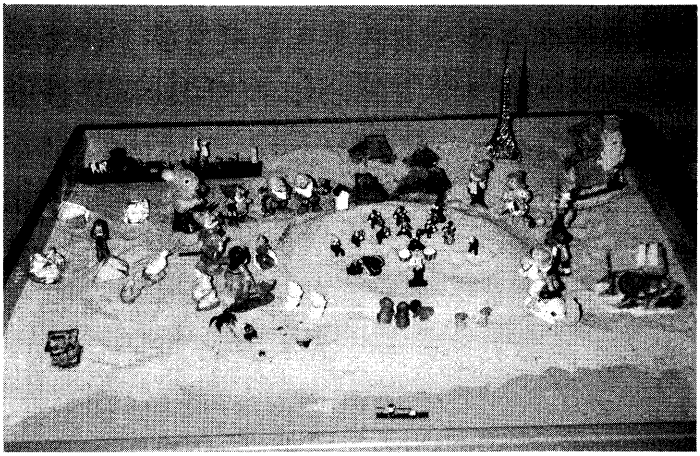
▲ 箱庭 3

箱庭4



▲ 箱庭 4

「小人さんたちおしごとしてるの」。小人さんたちのおしごとは、むこうの世界（より深い次元）で何かが達成され、その世界の生命を得ることをもたらしているように思われる。



▲ 箱庭 5

箱庭5

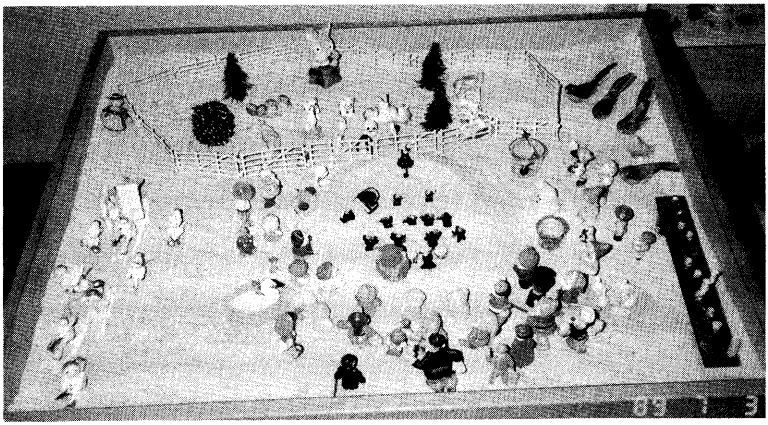
「みんなで演奏会聞いてるの」。むこうの世界をいっしょに楽しんでいるらしい。

箱庭6

「うさぎさんたちは、楽器をいたずらしてしまいたくなるから柵の中にいるの」。むこうの世界との境界ができたらしい。

箱庭7

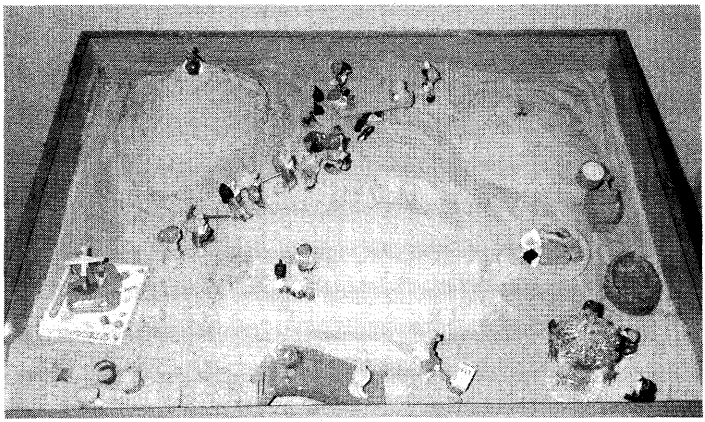
「小人さんたちは穴から出てきて山をのぼっているの」。小人さんたちはこち



▶ 箱庭6

らの世界に返ってきたらしい。

―うさぎさんたちの街―



▲ 箱庭 7

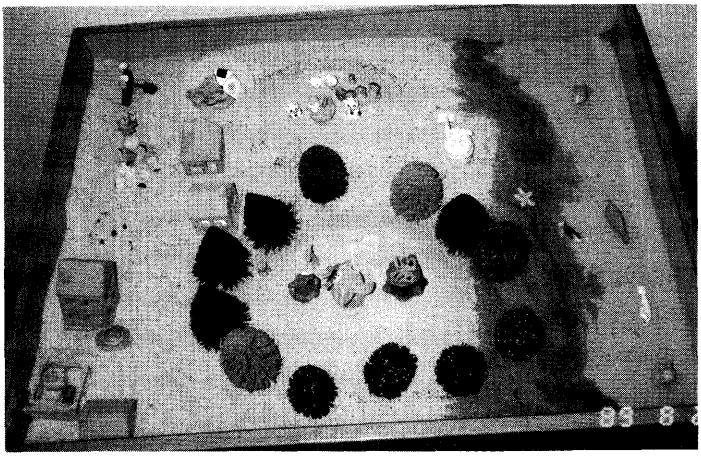
うさぎさんは舞子ちゃん自身でもあろう。

箱庭8

うさぎさん達もこちらの世界に帰り、うさぎさん達の街をつくったようだ。むこうの世界の演奏会をきいてきたうさぎさん達は、自分達で演奏会を開いているようだ。

箱庭9

うさぎさんの中心化が、まわりの街との関係がつきながらおきている。うさぎさんのこの段階での自己確立でもあろう七匹の小山羊は、水を飲みに行けて



▶ 箱庭8

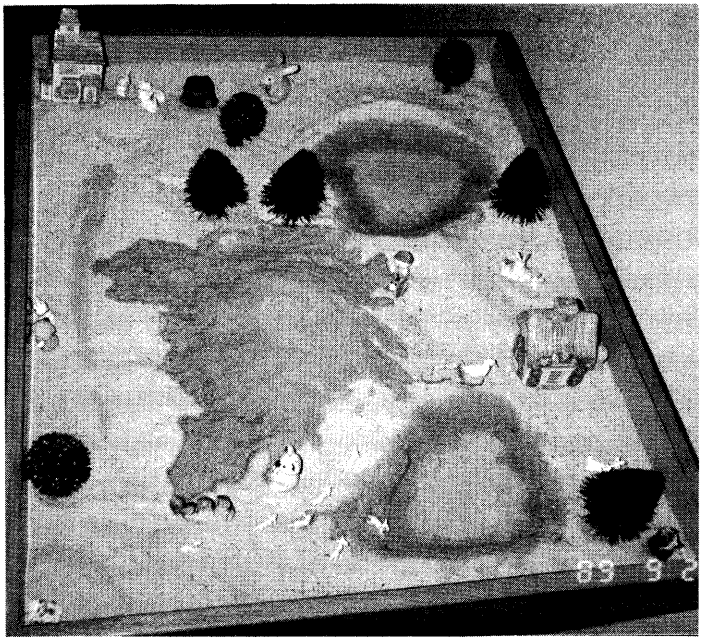
いるようだ。

▲ 箱庭 9

箱庭10

うさぎさん達はかくれんぼをして遊んでいる。川の前の女の子と猫が箱にひっついているのは「もーいいかい」と言っているのだそうだ。右上と右下隅

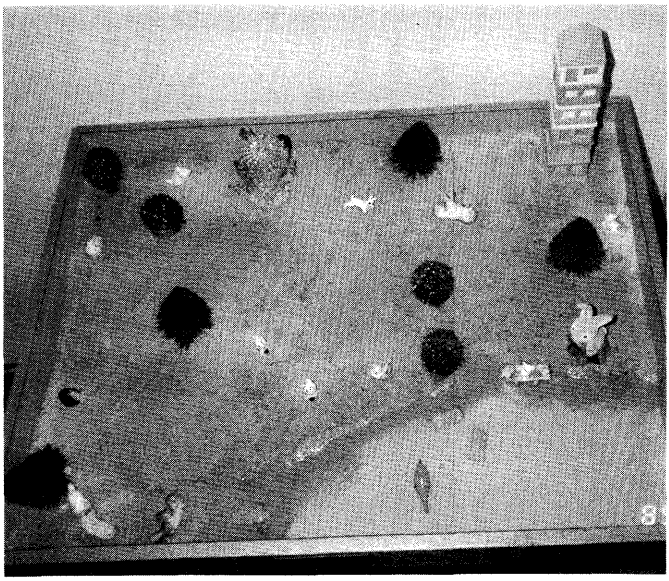
▼ 箱庭 10



には、お父さん人形と猫が砂に埋められ、かくれていた。

箱庭11

「雨のあと」。舞子ちゃんの内なる世界の創造物語はここで一段落をつけ、その物語世界にふたをしたらしい。いろんなできごとが山々となってふくらみ、その後で霧ふきで雨を降らせた。犬のえさ箱には水が入れられた。



▲ 箱庭 11

この後舞子ちゃんは箱庭をせず、お部屋に入いるとすぐに遊びはじめるようになった。こわい怪獣もいくつも使って戦うこともできるようになったし、もう声や音は聞こえないそうだ。舞子ちゃんの内界は収まるように変容し、また無意識との境界もできてきたのであろう。舞子ちゃんの先生のお部屋での遊びは、これからも続くのだが。

——終——

（このはな児童学研究所）

海外便り〈アメリカ編〉

Eさんへ

青木　章子

お元気ですか。ロサンジェルスで生活し始めて、早くも一年半がたちました。私は相変わらず、UCLAの附属幼稚園で、ボランティアを続けています。子供達とかかわる時、最初はなかなか飛び出してくれなかった英語も、随分なめらかに出るようになってきました。こちらは、長い夏休み（約三ヶ月間）が終わって、ちょうど新学年が始まったところです。

一学期の始まり方は、私には、とても目新しいものでした。入園・始業式がないのです。訪問日と言って、幼稚園の始まる前々日とその前の二日間のうち、午前中の好きな時間に、親子で幼稚園を訪れます。その時初めて、自分のクラスと担任の先生を知ります。先生は、部屋で新学期の準備をしながら、訪れる子供と親との挨拶・会話に忙しそうでした。とてものどかでリラックスした雰囲気の中、さっそく友達になって遊んでいる人達、ひとりでひとしきり遊んで帰る人、そのまますぐに帰ってしまう人など、いろいろでした。

幼稚園の第一日目、子供達は、八時半頃に各々登園し始めると、先生とおはようを交わしてから、室内やクラス周辺の園庭で好きなように過ごしていました。親達

は、先生と、又は親同士でおしゃべりしながら、自分の子供の様子を見ています。私は、と言うと、見通しが良くない園庭なので、子供達がクラスから遠く離れた所へ行かない様に、その都度呼び戻す役を引き受けていました。九時頃になると、先生は子供達（五歳児）を室内に呼び入れ、じゅうたんの上に皆で輪になって座りました。親達の見ている中、各児の名前を呼びかけながらのおはようの歌（子供達は、自分の名前が呼ばれるととても嬉しそう！）を歌い、その後、「この中に知っているお友達がいる？」とか、「夏のあいだに、特別なことがあった？」などの質問から、先生は、新しく受け持つ子供達との会話を始めました。（一クラスの子供の数は二十人前後で、五歳児クラスは、四歳からの在園児と新入園児との混成です。ただし、四歳からの在園児にとっても、友達は新しい集団で、先生も違う人です。）親達は、子供の様子を見ながら、ぽつぽつと去って行きました。これが、入園・始業式にかわる、幼稚園の始まり方でした。

私達が経験している幼稚園の最初の日（四月の入園式）は、子供にとって、親にとって（特に！）、そして私達担任自身にとっても、緊張と興奮の入り混じった、晴れやかでめでたい日ではありませんか。そのかわり、初めて会う親子と挨拶を交わすだけでも大変なのに、そのあと子供達を入園式の部屋まで連れて行き、親と離れて腰かけ、式のあとは自分達の部屋に戻って集合写真……と大仕事がたくさん。三歳児の時は、泣く子もいるし。その日は全く遊ばずに帰らなければいけないことに怒っているH君を、「明日遊びましょうね。」と、苦労してとりなしたのが、まだ記憶に鮮明です。それとは対照的に、成長を共に喜ぶ情感とか、節目を大切にする姿勢には欠けるのかもしれないけれど、子供にとってはより自然で、親も先生も淡々として気負いのない、幼稚園の始まり方に、私は、とてもさわやかでほっとするものを感じたのでした。

Eさんは、どのように思いますか。

さて、以前のお手紙の中にあった「親子の関係、子供に何を育てようとしているか、あれっと思うこと、なるほどと思うこと、いろいろ」についてですが、いくつかあります。

その一つは、子供が小さい時から、感じていること・考えていることを言葉にして表現できるように、そして、それを人に伝えることができるように、大人達が育てているということ。

子供同士にトラブルがあり、子供が悲しそうな顔をして先生のところに来たとします。すると先生は、何があったのかを確認しながら、必ず、「その時あなたはどう感じたの？」「なぜ、そう思ったの？」「それを○○ちゃんに伝えた？」などと尋ねています。四歳の幼い子供同士の出来事であれば、もう一方の子供の所へ先生も一緒に付いて行って、悲しい顔をしている子供に、「あなたがいやだと思ったら、こういう風に言えば良いのよ。」と、例えば、「私はあなたが私のことを○○と言うのが好きじゃない。言わないで。」とか、「私は悲しいの。あなたが私と○○と呼んだから。もう言わないで。」（和訳が不的確かもしれません。）と、先生自身がお手本を示してあげています。

ここでなるほどと思うことは、まず第一に、「あなたはどう考える？」とか「なぜそう思うの？」という大人の問いによって、子供は、自分の感情や考えの前提のようなものを確かめる機会をもらっているということです。「あなたはどう考える？」「なぜそう思う？」という質問は、子供に限らず、大人の私も、アメリカに来てから、より頻繁に受けています。聞かれたことに答える為には、言葉にして伝える為には、自分の感じていること、考えていること（…があるとしたら）が、何なのか、それが何に基づいているのかを、再確認しなければなりません。Eさんもご存知の通り、私はたいてい考えがもやもやとはっきりしないことが多いものですから、この手の質問には最初、当惑してしまいました。（何も考えていないことに気がついたり、言葉の壁もあったりして。）考える訓練・話す練習をしてこなかったこと

を、人のせいにしてはいけないのだけれど、子供の頃から家庭や学校で、大人が「あなたは……？」と尋ねてくれたことの記憶に乏しいのは、私だけでしょうか。

「あなたはどう考える？」「なぜそう思う？」に関連して、もう一つ思うことは、「あなたは……？」という問いが、小さい子供に出される時、そこには、親や先生が、子供を幼児の時から独立した一人の人間として尊重している態度があるということです。一体なのではなく、一対一の関係で、子供に向かう姿勢があるということです。他の例として食事の場面を思い浮かべてみると、親が自分の皿から食べ物を分け与えていたり、子供に先に食べさせて、残りを自分が……という光景をアメリカであまりみることがないのも、それらの態度の表れかもしれません。

最初、先生と子ども、親と子の関係（特に、白人と言われる、アングロサクソン系の人々）をみて、つながりが希薄なのではないか？、日本人に比べて関係が淡白なのではないか？と感じていた私ですが、この頃は、関係のもち方そのものが、少し違うのだということに、気がつき始めています。

話が少しそれました。自分の感じていること・考えていることを、言葉にして表現し、それを人に伝えることに関して、もう一つなるほどと思うことがあります。子供達は、小さい時から、自分の気持ちを表現し、自分の考えを主張できるように、大人達に導かれていると同時に、人の話を聞く姿勢も教えられていることです。先生や親が、子供に、「今は私が（○○ちゃんが）話している番よ。あなたは聞いていなければいけない。」などと言っている場面を、よく目にします。当たり前のことなのだけれど、自己表現が豊かで、友達に対しても適切な自己主張のできる子供は、人の話を聞こうとし、人の気持ちをわかろうとする姿勢も育っているなあと感じます。自分のことを主張するばかりで、人の話には耳を貸さない、勝手に育ってしまった〝自己主張〟とは、全く方向の違うものだと思っています。

この他に、最初はあれっと感じ、今はなるほどと思っている（と言うか、混乱している）ことの一つは、武器おもちゃを作ったり、使って遊ぶことに対する、大人の態度です。

子供は、ブロックや工作などで、自分のピストルや剣を作って遊ぶのが好きですよね。日本では、テレビの影響が大きいと思いますが、たたかいごっこと称して、それらの武器を持ち、自分が強くなった気持ちになって友達同士で遊ぶ姿、又は一人でバーンバーンとやっている姿は、とても自然なことのように感じます。私が三歳児の担任をしていた時はよく、幼稚園のお山で男の子達と（数人の女の子も混ざり）、うちあいをまねたり、紙の剣を振り回したりして、一緒に駆け回って遊びました。

UCLAの幼稚園でボランティアを始めた頃、子供達がたたかいごっこのような遊びをしないことを、不思議に感じていました。ある時、四歳の組の男の子数人が、ブロックを組み立ててピストルにみたて、バーンバーンと遊び始めました。私も一緒に、手のピストルでやりとりしようかなと、人差し指を出しかけた矢先、先生が子供達のところへやってきて、「学校に銃はいりません。」とはっきり言いました。きまり悪そうにブロックを分解する子供達を見て（バナナのおもちゃをピストルにみたてていた子は、別の場面で、「これはバナナだよ。むしゃむしゃ」と、とぼけていましたっけ。）、私は、子供達がそれを悪いことだと思っていることを感じとりました。私は、神妙な顔をしながら、〝人差し指、出さなくてよかった。〟と思っていたのですが、これは私には、とても印象に残る一コマでした。その後にも、子どもがピストルをうつまねをするとか、武器を作ろうとする時に、親や先生が真面目な顔で禁止する場面には、何度も出会いました。あの時の、私の心の中での反応は、――どうして、そんなに神経質に止めなければいけないのだろう？子供にとってはとても自然なことではないか？――です。こういう遊びを幼児期にすることが、将来攻撃的な人間を作るのでもなく、平和を破壊する人間を作るのでもない。逆に、子供の時代にこそ、

ごっこという形の遊びの中で、自分の攻撃性を害なく発散させ、同時に、本当にぶったりして相手を痛くしてはいけないなどの限度――空想と現実の境界――と、行動のコントロールを学べるのだ、と自分の中で反論していました。

ところが、ロサンジェルスでの生活を一年以上経た今、この私自身が徐々に変化し、子どもがピストルをうつまねや、それらを作って遊ぼうとするのを、遊びとしては認め難い思いが持ち上がるのです。おそらく、〝たたかいごっこ〟そのものに対する反応というより、武器に対する反応だと思うのですが…。日本にいた時、先生である自分が一緒になって、よくバーン・バーンなどとやっていたものだと、今思うと恥ずかしくなると同時に、それが、やってもいい〝ごっこ〟に入る（？）ほど、日本は安全で、銃に対する現実的心配のない国なのだと痛感しています。（ちなみに、ロサンジェルスでは、近所のスポーツショップで、簡単にピストルやライフル銃が手に入ります。それらに伴う暴力や犯罪に恐怖を感じながら、私は生活しています。）

たたかいごっこや武器おもちゃに対する反応の仕方については、親や先生に限らず、何人かに聞いてみたところ、アメリカでも人それぞれの様です。ただ私は、「NO！GUN」と言う大人の、真剣な表情から、子供達は何かを学び取っているのだと思います。私自身の、武器遊びに対する感受性や態度の変化に驚いていると同時に、日本のテレビ番組や市販おもちゃなどにみられがちな、感覚の鈍さに、考えさせられているところです。

今、アメリカに来たからこそ勉強してみたいことが、いくつかあります。一つは、移民の子供達の保育・教育――アメリカでは、後手になっている為に大きな社会問題――です。アメリカにいると、日本が、単一民族・単一文化、単一言語をお国柄としていける時代も、経済的・政治的要請から考えて、そう長くはないように感じてしまいます。また、機会があったら、お手紙書きます。

（ロサンジェルス在住）

遊びのまわりで

――二人の保育者の語り――

片岡　知子
猿渡英理子

A　おもちゃと子どもということで今日は話をしてみましょう。

B　〝おもちゃ〟というとどうも既成のものという感じがしますが、子どもが遊んでいるところをみていると、自然物と対している時が生き生きして楽しそうですね。

A　去年は池でたくさんおたまじゃくしが生まれたんですよね。

B　あれは楽しみましたよ。

A　毎日毎日飽きずに、砂場のカップやバケツをもって池のふちに集まりましたね。最初はやっぱりカップをつかってもなかなか捕まえられなかったけれど、毎日毎日ですから、すぐうまくなりました。

B　そうですね。カップを使ってとれるようになると今度は手ですくったり、それを手のひらで、あのにゅるにゅるの感触を楽しんだりもしました。大きな葉に木の枝をさして金魚すくいの網のようなものも作ってとりました。

A　カップよりそういう網まで自分で作る方が数段おもしろいですよね。その子なりに工夫してじょうごのようにする子もいたし、それに見つけたはっぱによっても違うんです。

　はっぱというものすごいおもちゃですね。

B　そうそう、私はすすきの葉のような細長いはっぱでバッタが作れるんです。

A　ええ、いなかで教わりました。高原で山ほど作りましたね。背中のあみ方が本物のバッタのようで、実にリアルでしょ、私の友だちは本物だと思って捕まえようとしました。

　これも子どもたちに教えたいですね。そんなに複雑なあみ方ではないんです。昔の人はこれでかごも作ったんですね。

B　遊びながら覚えたことが、自然に生活の中に生かされていったのですね。それにしても、一枚の葉から立体的なものができあがってしまうのは不思議です。

A　はっぱは染料にもなるんです。昔よくつゆ草やおしろい花で色をつけて遊んだでしょ。だいたいどんな葉や茎や花でも煮ると布が染められますよ。

B　毎年色水あそびをやるけれど、あれも絵の具やマジックやリボンを使うより、花や草でやりたいんです。

A　本当にそうですよ。でも幼稚園では子どもの数が多すぎて、どうしてもそういう教材に頼ってしまうんです。草や花を野原から摘んでくるところからあそびは始まるんですよね。

B　今日はヒメジオンを煮出して布を染めました。少し渋めの草色が染めあがって、二人で大喜びしました。

A　ヒメジオンは、どうやら雑草らしいんです。草取りの季節には容赦（ようしゃ）なく刈られますから。でも染めるようになってからは、あの花に愛着がわいて、道端でみつけると「あった、あった」と喜んでしまうんです。

B　そういうわけで家の草取りはなかなか進みません。草木染というのは、草のいのちをもらうことなんですね。ただ燃やしてしまうのではもったいないですよ。

A　自然のいのちをもらうのだったらとことん生かせたら本当にいいですね。大昔の人は狩をすると動物の肉や皮や内臓の袋まできっちり使いきっていたんです。

B　そう、エイラ[*1]でしょ。ローラ[*2]もそうでしたね。

A　今でもそうですけど、家族が作ってくれたおもちゃはいいですね。私のクラスのおかあさんで、かまぼこの板を糸のこで切ってパズルを作るという方がいるんですよ。

B　まあ、幸せですね。

A　その子は工作がじょうずで、あるものを工夫していろいろな楽しいものを作っています。

B　きのう着物のはぎれをみつけて、お手玉を作りました。四枚はぎで作るのはなかなか難しく、何回も失敗しました。もし、私たちの母がお手玉を教えてくれなかったら、この楽しみも知りませんでしたね。

A　でも母のようにはうまくいかないですね。

B　お手玉の大きさとか中のあずきの量とかによっても投げやすい、受けとめやすいがあるんです。お手玉はなかなか奥が深いです。投げる時の加減で手首のスナップが要るし、リズム感もなくてはなりません。

A　唄にあわせて遊ぶのもあるでしょ。あれも、おばあちゃんからおかあさんそして子どもの代に口伝えで伝わってきているものですね。お手玉はお仕事会[*3]で作っていただきましたから、じゃんじゃん遊びたいと思います。

B　でも、幼稚園だけじゃきっとうまくならないですよ。これをきっかけにお家でもおかあさんやおばあちゃんと遊んでほしいですね。昔は、うまくできると相手のきれいなお手玉を手に入れることができて、そのために必死で練習したんですよ。おはじき

やめんこと同じに。それがあの技につながっているのではないかと思います。競いあうことが。

A　そうですね。私が子どもの時はお手玉で競いあうということがなくて、家で遊んでいただけですから、他の人よりできるといっても、三つ操るのがやっとですからね。この夏は、せっせと練習して競いあいましょう。

B　ええ、一歩リードされてますけどね。負けませんよ。

A　私、中村征夫さんという方が好きなんです。もうおじさんなんですけどね。こまやとんぼとりがうまいんです。本業は水中写真家なんですが……。私はあいうおばさんになりたいです。

B　年をとっても一度身についた技は生きてますからね。一生遊べる術をたくさん身につけておくと人生楽しいですね。おばあちゃんになってやることがないと寂しいですよ。

こまは幼稚園でもやりますね。私は年長のいちばんうまい子と競ってついつい本気になり部屋のガラスを割ってしまいました。年長は自分のこまに色をつけて〝自分だけのこま〟を作るんです。一生の宝物にしてほしいですね。

A　けん玉もおもしろいですね。プリンのカップと広告

紙を丸めた玉で作ったことがあります。あれもひもの長さにほどほどのよいところがあるんですよ。

B　隣でみていて、とても簡単にできて、それで十二分に楽しめて、いいなと思ったんです。広告の紙は何にでもなっていいおもちゃです。細く丸めてつくる剣がいちばん人気があって毎日剣を作っています。毎日たくさん作るのが大変だったから、ある日まとめて作って花びんにさしておいたんです。そうしたら、子どもは見向きもしなかったんです。やはり、目の前で作ってもらう方が、わくわくして楽しいんですね。

A　細く丸めるために初めのところをなめたり、机の上ではすべるからじゅうたんの上でするというこつは、年長から伝えられます。

B　おだんごつくり等もそうですね。

A　おもちゃというのは作る過程を楽しむものなのだと思います。何回も失敗することも楽しみのひとつです。

B　それに一生懸命作ったのをこわしてしまうのも遊びの重要な部分ですね。

A　そのおもちゃを定められた遊び方で遊ぶのではなく、自分だけのおもしろい遊び方をみつけてほしいと思います。

B　しばしばそれは大人の立場からみるとやっかいなこともあるけれど、それが楽しみで保育しているんです。子どもの発想は無限ですね。予想を裏切られるのは楽しいです。

※1　「大地の子エイラ」の主人公　ジーン・アウル著

※2　「大草原の小さな家」の主人公　ローラ・インガルス・ワイルダー著

※3　大和郷幼稚園では、年に一度子どものお母さん方に、手作りのおもちゃを作っていただいている。

（大和郷幼稚園）

若木（わかき）が三歳になる頃

杉本　裕子

（若木が三歳になる頃。このころ私は若木に対してとても口うるさく、小言ばかり言うようになっていた。下に生まれた実生（みお）が三か月になった頃でもあり若木と私の関係が少し様相を変えはじめていたのだと思う。その頃考えていたこと。）

幼い子どもがいると、近所の子ども達やその母親たちと、毎日のように顔をあわせて、一緒に遊んだり話したり、色々な体験を共にする。

楽しいことも多いが、またときには誰かが泣いたり怪我をしたり、オモチャが壊れたりなくなったり、またそれらの出来事に巻き込まれて、母親がひどくヒステリックになってしまったり、重大なこととはいえないまでも、その場に居合わせたみんなが淋しく悲しい思いをすることがある。すると、私はこういうときについ、誰かをせめて自分の気持ちを落ち着けたくなってしまう。あ

の子があんなふうだからとか、あのお母さんはあんな言い方をしなくてもいいのにと、心のうちでひそかに他の人たちにマイナスてんをつける。でもそんなことをしていても、なんの役にも立たない。それどころか、言葉には出していないのに、私のそういう見方が若木にも、場合によっては他の子ども達にも伝わってしまっているような気がするのだ。すると、子ども達がそれぞれの遊びを展開していた豊かな場が、たちまち居心地の悪い、不毛のところに変わってしまう。大人もそうだが、それ以上に子ども達がどんなに、その場を見守る大人たちとの信頼関係に励まされながら遊んでいるのかを、改めて考えさせられる。

人を非難するという安易に走りがちな自分の傾向と同時に、私は若木に対する自分の暴力のことを考える。どちらも根っこは同じなのではないだろうか。若木は今、幼くて弱い存在だから、私は彼を力でねじ伏せることができてしまう。私は母親だから、そうしてもたいていは躾という大義名分を借りることはできる。だが、私が感情に任せて若木を叱り飛ばしたり、意地の悪い、冷たい言葉を投げたとき、また頑なに私の好みだけを押しつけるとき、若木はとても悔しそうな、恨みと怒りをこめた燃える目をして私をにらみ、ぶち返してきたり怒鳴り返してきたりする。この鋭い怒りは私の大義名分など吹き飛ばしてしまう。行儀や道徳より何かもっと切迫した、もっと本質的なことを訴えているのではないか。その激しさにはっとさせられながら、この子供が怒っているというよりは悲しんでいるのだということに気づかされる。私は今、若木が幼く弱いということに対する、自分の優越を誇示していたのだ。それこそは、子どもとの関係において大人が自らを律していく点であるのに。相手に対する優越に頼っている関係では、自分のことしか見えなくなってくるのだ。そんなことはよくわかっているはずだったのに。でも正直に自分を見つめれば、子育てにおいても、近所の人たちとの関わりにおいても、人間関係のもっとも基本の原理に立ち戻らなければならないようだ。

今ごろこんなことを言っている、私自身の芯に情けないものを感じながら、それでもとにかくがっかりしたまま、ぼーっとしているわけにはいかない。目の前の子どもは五分もしないうちに泣きやんで、また別のことを私のところにもってくるのだ。ただとりあえず、この次は若木にこんな失礼なもの言いはしない、今してしまった私のひどい振る舞いをすぐ謝る、その決心を鈍らせないことだけだ。どんなに馬鹿馬鹿しく失敗を繰り返しても、そうすることしかできないのだから。

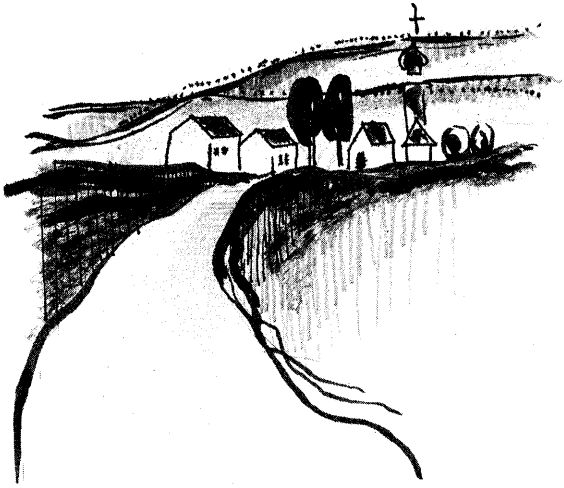
（実際私は失敗を繰り返しながら、数か月を過ごした。若木は手探りの迷える母親をしりめに、どんどん自己実現の体験を積み重ねている。）

若木は三歳になって急に、同じ年ごろの子ども達、とくに四～五歳の少しだけ年上の男の子たちと遊びたくてたまらない様子だ。ある日公園に二人の五歳くらいの男の子たちがいた。若木ははじめ離れたところからずっと二人を見ていて、他のことも目に入らない様子だった。それから次に私が若木に気が付いまときには、二人のそばにいっていて声をかけられている。年上のひとりが若木に「おまえ何歳だ？」と何度もきいている。若木はきかれるたびにくるっと向きをかえて、ダダダッと少し離れたところまで走っていく。そしてまたあの子たちのほうをじっと見るのだ。大きい子たちはそんな若木が何ともうさんくさいのか、こんなことを繰り返すうちに次第にぶぜんとした表情になって、二人して若木をおいかけはじめる。若木はときどき威嚇するような大声をだしながら走り、家のほうに帰る階段をどんどん登っている。私はこのあたりまで遠くから見ていたのだが、若木が怖くなって泣きそうになっているのだろうと思い、ここで若木のところに声をかけながら近づいていった。二人の子たちは私に気がついてかどうか、怒ったような顔をして若木のほうを振り返り振り返りどこかに行ってしまった。若木は私に呼ばれて階段を降りてきながら、「大きいお兄ちゃん達と遊びたいよおっ！」と声をふりしぼっ

て泣き声をだしている。

若木はあの二人の子たちとのコミュニケートが最高にうれしかったのだ。若木の全身全霊が興奮する出来事だったのだ。若木の心と体の奥で目覚めた望みに応えるものを自分で見つけて、自分でそれを得ようとしていたのだ。おまえ何歳だ?ときかれたときの若木の表情は、あの子たちには背を向けてしまったけれど私には見えた。うれしい、うれしいけれどどういうふうに応えたらいいのだろう、どんなふうにしたらかっこいいだろうと迷いながら、精一杯威勢よく頑張っていた顔だった。

そういえばこんなこともあった。スーパーで買いものをしていて、若木はビニールボールをひとつ自分で取ってきた。これを買うのだと自分で決めて、一度は私が持っていたカゴのなかに入れたのだが、また取り出して手に持っていた。しばらくしてレジのおばさんが「お母さんと一緒にいらっしゃいね」といっている声がするのにきがつくと、若木がひとりでそのボールをレジに持っていって差し出している。人見知りをする若木がこんなことをしたのは初めてなので、私も驚きながら呼ぶと、若木はこちらを振り向いてニヤッと笑っている。私は一



瞬若木のその表情の語っていることがとても可愛く思えたのだが、すぐ、レジのおばさんが怒っているんじゃないかということに、私の反応はすっかり支配されてしまった。すみませんと謝りながら若木を力ずくでレジの前からひきはなしてしまった。

後になって何度思い出しても心が痛む。どうしてあの時、あのニャッを受けとめられなかったのだろう。いくらでもやりようはあったのだ。そんなに難しい場面ではなかった。だが、あの時私は自分の弱いところを突かれていたのだ。レジのおばさんに怒られるのは、社会秩序を代表する権威から叱責を受けることであり、すみませんと子どもを引き戻すことで、それに対する従順を示したのだ。実際にあのおばさんがひどく怒っていたということではなく、私のほうの思い込みと過敏な反応だった。私には、自覚している以上に、秩序や権威に迎合する傾向があるようだ。それは以前にも感じた、相手からの優越を求める気持ちにもつながるのではないだろうか。

若木もまたこの時、社会に直接、保護者抜きで、関わろうとしていた。オモチャを買うという社会的な行為を、自分に貯えられている経験を総動員して、まったく自主的にしようとしていた。これは日頃恥ずかしがりの若木にしてみれば、驚くほど勇敢な行為なのだ。この時私のほんの一言の援助があれば、若木にとっても貴重な体験が達成されたのだろう。でもはからずも若木は、私の社会との関わりを観察することになったのだった。

（私は相変わらず低迷しているが、若木は内側も外側もたくましさを増してきている。）

あるオモチャの飛行機は、スーパーのビニール袋で包むときれいな三角形になる。日中に一度そうやってくるんであった飛行機の包みを、夕食後にまた持ってきて、もう一度このうえから包んでくれという。私はかたづけものをしていたので、若木がどんな顔をしているかもよく見ないで、「ハイハイ」と受け取りササッと包ん

で、若木が持ってきていたセロテープでピッと留めて、ポイッと若木の手に返した。その時若木が満足して受け取ったような感じがしたのを覚えている。それからまた私は忙しくしていて、やっと二人を寝かし就けたあとふと気が付くと、若木の枕元にさっきの包みが置いてあるのだ。

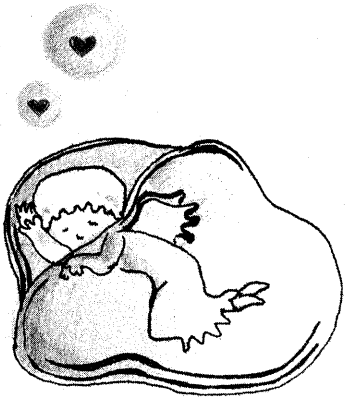
私にはその包みは、なにかをいやし、慰めようとしている若木の気持ちのあらわれているもののように思える。日中若木は外で力一杯遊んでいる。すぐ泣いてしまう女の子をうまく扱えなくて、イライラしているところを私から叱られて頭にきたり、年長の男の子たちに今度は自分が泣かされそうになりながら、必死に一緒になって遊ぼうと、あとを追う。そんな色々な心身の疲れや痛みを、ちゃんと自分で持ちこたえようとしているのではないだろうか。それはもう、母親にうったえて母親に引き受けてもらえることではないのだ。——そうだとしたら、この子どもがこうして自分をいたわり、休ませているということに私は感嘆してしまう。エネルギッシュに活動し、自分のうちからわき出る望みを実現することに全力を傾けているこの子ども。また一方では、そういう活動のなかで感じた痛みを、まるでそれもまた自分の血肉としようとしているかのように包み込み、自分のものとして引き受けている。なんと真面目に、誠実に生きているのだろうか。私は自分の傷ついた思いも大切にしていくよう、若木に励まされた気がする。

そういう若木の傍らにいる私自身のことを考えてみると、若木の充実した、真剣な行為に応じるのには、危うい、すれすれの対応をしていることが多い。しかし私は私で、子ども達の体や生活を整えていくという仕事に一生懸命なのだ。危うくてすれすれでも、今の私にはまだ仕方がないと思う。ただせめて、私の仕事だけを厚かましく、当然よといった顔で最優先させていくようなことをしないでいられたらいいのだが。

（ふと気が付くと、私は前ほど若木を叱らなくなっている。私のなかで何かが少し、変わったのだろうか。）

若木のほうからの親離れと思っていたけれど、よく考えてみると、お腹に実生ができてから私のほうから若木に、離れろ、ひとりでやっていけ、と言い出していたのではないだろうか。おしっこを失敗してはひどく叱られる。掃除や炊事をしているときに、遊ぼうよとねだるとまたひどく叱られる。眠かったり思うようにならないことがつづいてぐずると、しゃきんとしなさいと怒鳴られる。

私が何だかイライラしていたあの頃は、色々なことが時期を同じくして起きていたのだと思う。妊娠・出産に伴う私の心身の変調。若木の諸能力の加速度向上。とくにことばによるコミュニケーションの習得。若木の身体の発達、それによって赤ちゃんぽさが抜けていく。私のほうに起こった変化は、以前のように若木を心も体も丸ごとすっぽり受けとめることをできなくさせたのじゃないか。若木のほうも、私の腕のなかにすっぽり納まる大きさではなくなってきていた。そして私たち母子の関係が少しずつ変わりはじめた。お互いにとって大切なことが一度に芽吹いているこの時期を、しっかり自分自身に刻みこむように過ごしていきたい。



安島智子先生の「私の出会った人々」シリーズ、今回が最終回となりました。一年間、どうもありがとうございました。毎回毎回、我が身と我が子をふり返り、身につまされる思いで読ませていただきました。先日、最終の原稿をいただきに、はじめて、先生の研究所におじゃまいたしました。お部屋に入ると、箱庭療法のための、ミニチュアのお人形や小道具、おもちゃが棚いっぱいに並んでいて、大人の私でも、手にとって遊んでみたいような気持ちになりました。これからも子どもたちの「心」のため、御活躍下さい。

アメリカから青木さんのお便りが届きました。去年お会いした時には、アメリカの幼稚園は、システムはきちんとしているが、子どもの心に沿っていない、子どもたちがかわいそう、と涙をうかべていらしたのに…。一口にアメリカといっても教育事情は様々でしょうが、個人を大切にするという基本が、具体的に細かく積み重ねられている点、うらやましく思いました。私達の身のまわりでは、「○○ができる」「○○が作れる」「○○を知っている」…ということが良いという評価をもらい、それで満足している部分もあります。日本の社会では、まず人間関係が重視されるため、自分の考えを主張すると、とたんにまわりからういてしまい、気まずい思いをすることがよくあります。それぞれのお国ぶりで、学ぶ点や、いや、それは日本の方が良い、と思うことなどいろいろです。

このあとも、海外からのお便りをいただく予定です。どうぞ楽しみにお待ち下さい。

昨年の暮、息子が入学する小学校の就学時健診がありました。コチコチに緊張して、それでも一人で何とかやってきました。又一歩、一年生に近づきました。つぎはランドセルです。（K）

幼児の教育

第八十九巻　第二号
（一九九〇年二月号）

定価四一〇円（本体三九八円）

平成二年二月一日　発行

編集兼発行人　本田和子

発行所　日本幼稚園協会
東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館
東京都千代田区神田小川町三―一
振替口座　東京九―一九六四〇
電話　〇三―二九二―七七八一

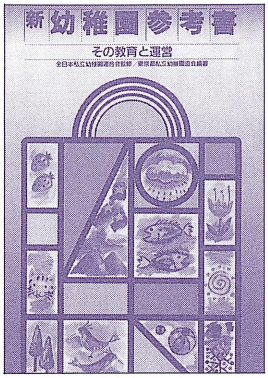
●本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお願いいたします。
●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

—新幼稚園教育要領〈実践〉—

新幼稚園参考書

その教育と運営

全日本私立幼稚園連合会監修／東京都私立幼稚園協会編著



「幼稚園参考書」が生まれ変わりました。
幼児の自発性を伸ばすには——
遊びの総合性をどう組み立てるか——
新しい教育要領をふまえた
『新幼稚園参考書』は
先生方の強力な助っ人です。

目次より

第一章　幼稚園教育の本質を考える
　1　幼児が育つことと幼稚園教育
　2　幼児を理解する
　3　幼児の生活とは
　4　教育要領改訂の視点ととらえ方
　5　幼児教育の内容と方法
　6　私立幼稚園の特性と存在の意義
第二章　幼児の教育を計画し実践するために
　1　教育課程・指導計画を考える
　2　指導計画作成のポイント
　3　指導計画の実際例とその展開
　　—長期・短期、年齢別、保育形態別
第三章　幼児の生活を考え充実させていくために
　　—各園の実践例から—主体的生活・
　　行事・総合性・領域・障害児
第四章　園やクラスをいきいきと運営するために
　1　園運営の基本的考え方
　2　クラス運営の実際
　3　保育の担い手としての保育者
第五章　幼稚園教育の歴史と展望

B５判・上製本・436頁・定価4,000円（本体3,883円）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

倉橋惣三選集〈全4巻〉

B6判　上製本ケースつき

わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界において読み、語り継がれています。保育者にとっての座右の書です。

東山魁夷装丁の美装本!!

第1巻	幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル/416頁/定価2,060円(本体2,000円)
第2巻	幼稚園雑草/448頁/定価2,369円(本体2,300円)
第3巻	育ての心・就学前の教育他/472頁/定価2,472円(本体2,400円)
第4巻	保育案他/456頁/定価2,472円(本体2,400円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

フレーベル館